

武田信玄 長尾謙信 本朝二十四孝

第一

春は曙やうやく白くなりゆくまよに、雪間の若菜青やかに摘出でつゝ、霞立ちたる花の比はさらなり、さればあやしの賤までも、おのれくが品につき、壽き祝ふ年の兄、ましてやいともやんごとなき、大樹の下たじゆのきの梅が香や、まづ咲初むる室町の、御所こそ花の盛なれ。君は足利十二代源義晴公、左大臣に任官あり、武威海内に輝きて、のべふす六十六つの花、豊なる世の貢物、殊更おもひものの腹に御男子懐胎ありければ、なほもめでたき春ぞとて、北の方たをやめ御前、相州の太守北條相模守氏時、越後の城主長尾三郎景勝、其外參觀の大小名、大流、小流、松竹島臺、露の臺、かよる時代におほ廣間、おのく賀儀を申さるゝ。氏時御前に謹しんで、「御先祖足利尊氏公、二つ引兩の旗を以て、天下の棟梁と成り給ひ、五畿内は申すに及ばず、八隅の外まで威勢に靡き、面を上ぐる者もなきところに、此頃諸國にわれくの合戦起り、就中甲斐の住人武田晴信、越後の謙信と鋒先を爭ひ、君命に従はざる條、上を恐れぬふるまひ、

きつと糺明もあるべきを、其儘に差置き給ふは、且は武威の薄きに似たり。如何計らひ候はん
と、我は顔に言上す。義晴打點頭かせ給ひ、「我も此事歎かはしく、兩家和睦を調へんと、先だ
つて兩國へ此旨を申遣し置く。さりながら謙信が嫡子三郎景勝、疾くより我に昵近し、忠勤厚
き武士、只心得がたきは親謙信、俸を登し今日まで、上洛致さぬ心底訝かし。親の心子知らず
といへども、父の心中よも知らざる事あらじ。景勝いかに」とありければ、三郎大きに恐入り、
「親謙信儀老體の上、多病によつて引籠り罷在れば、名代の景勝、君御召の御説の趣、早速申
達しつれば、上洛の日限も一兩日の間は過ぎず。又晴信と不和なるは、彼家に傳へし諏訪法性
の兇、隣國のよしみに借受けしを、武田の武勇を羨むなど、下様の惡口、一徹短慮の親ども、
彼是詞戰ひより、思はぬ確執となりし事、如何ばかり我等が歎き、まづ晴信を召寄せられ、
君の御詞を添へられんに、誰か否と申すべき」と詞の半、北條の家臣、村上左衛門罷出で、「武
田晴信參上」と、取次ぐ聲にお次の襖、引立烏帽子のおのづから、智勇備はる甲斐の國、武田大
膳大夫晴信、御前間近く出仕ある。たをやめ御前宣ふ様、「武勇烈しき長尾武田、君の柱と思し
召し、兩家和睦をはからせ給ふ、有りがたき御上意ぞや」と、傳へ給へば義晴公、「汝謙信と不
和の基、法性の兇とやらん、武田の家の重寶とは、何れの代より傳はりし、語れ聞かん」と仰

せける。晴信取りあへず、「さん候、元此兎は、我等が氏神諏訪明神より夢の中に賜はつて、明神の使はしめ、八百八狐是を守護す、神通力加はつて、是を著する度毎に、合戦勝利を得ざる事なし。越後の謙信隣國のよしみ、拜せん望默しがたく、彼方へ持たせ遣はせしが、俗に言ふ、心安きは却て不和の基とやらん、畢竟何の詮なき争ひ、晴信において聊も、御詮に漏るゝ事あらじ」と、おとなしやかに述べらるれば、北條氏時進出で、「コレ晴信、兩國合戦に及ぶ一大事、子供童のいさかひ同然、よも左様の事ではあるまい。兼て親しみある甲斐越後、故もなき合戦は、東八ヶ國を騒動させ、其虛に乗つて大將の御所を騒がす兩人が言合せの軍と御疑ひかゝつた上、輕々しき和睦の受合、猶以て吞込まぬ。必定野心なき言譯、聞かんく」と詰めかくる、主の尾に付き村上左衛門、「氏時公の御眼力、あつばれ黒星。ぬらりくらりのぬめた晴信、謙信の狸入道、長尾の小狐化顯はせ」と、何かな障へる心の底、一物ありと見て取る景勝、「コレ村上、御邊は信濃國の住人、晴信謙信合戦の節も、隣國の加勢に言寄せ、兩國をしてやらんと召されしかど、底意知れずとはかりし故、先御邊から攻討ちしに、牛房程な尾をふつて、はふくに送けられしが、都へ登り氏時殿に媚諂ひ、食客の陪臣奉公。其無念を晴さんと我々が中をさきたがる。夫はともあれ、君の御詮、御邊達が出過ぎの助言、すつこんでお居

やれ」と、一口にやり込められ、面を赤めて閉口す。北の方聲うるはしく、「假初の詞にも、猛きは武士の習ひにて、此争ひを鎮むるは、弓矢の力に叶はぬ事。胡國とやらんの夷だに、王昭君の色にめで、陣を引いたる例もあり。景勝の妹に、八重垣姫とて聞ゆる美人、武田には勝頼とて、年比同じ子のある由、軍を直に縁の端、我君の御媒、幸ひ今日の此島臺、齡も相生松竹に、花菱は武田の印、竹に雀は景勝の、烏帽子の長尾末かけて、中睦じう致されよ」と、いと畏まる御計ひ、「コハ冥加なき御仲立」君が仰せのかひあつて、互ひに力ゑちごの國、中を結びし大將の、詞は木曾の棧道や、踏みかためたる足利の、家の榮ぞ久しけれ。名に高き軒端の梅の色そへて、老若男女わかちなく、願ふ誓も誓願寺、茶屋の床几に硯箱、發句俳諧三十一文字、歌に和らぐ都の地、今を盛りの梅が香や、左大臣義晴公の妾、賤の方を設の幕、打廻したる花の下、此下蔭の宿より、御身にやどる五月の、帶の悦び身の願、腰元婢に至るまで、綺羅を飾りし鋳乗物、御供には直江山城之助、跡に引添ふ徒士若黨、中間小者にいたるまで、茶辨當から烟草盆、皆取揃へ歩み來る。山城は心得て、「申しく賤の方様、もう是が誓願寺、誓し是にて御休み」と、申上れば賤の方、御乗物を出で給ふ、花もおさるゝ御姿。「ナウ山城、今年は取分け誓願寺の、花も一入盛と聞き、義晴様に願ひを立てて來りし故、其方衆もいかい苦勞」と、仰

に山城頭を下け、「ハア有難き御詞。コレ腰元衆、向うに見ゆる山々を、賤の方様に一々教へ申されよ」と、指圖に三橋がしやくり出で、「申し賤の方様、御覽遊ばせ、アレく向うの高山は、比叡山と申して都の富士。扱其次は銀閣寺、棟も名高き高臺寺、名高き事を釣鐘に、鳴響かせし千疊鋪、大佛様と背競べの三十三間堂。又此方なは鞍馬山、僧正が谷の筈に響く、みぞろが池の水の音、サツサ加茂川流れも清き、上加茂下加茂金閣寺、衣笠山の五體佛、西行櫻、三條小橋、出合うた所が壬生の寺、四條川原の芝居側、朝はとうからくと、待兼山の時鳥、夫は町中のしやれ詞、聞きにきた野の天神様、三十一文字の歌よりも、當世流行る阿漕が土、どうした事やら此比は、文も便もない戀中の、數もよまれぬ螢火や、祇園の社楊弓の、音はかつちりとんくと、當り初めたる通天」と、口合たらくだらくと、長ことくを言ひければ、皆々興にぞ入り給ふ。「大黒舞を見さいな、福大黒を見さいな、新玉の年の始の福大黒」と、聲しほらしき幕の本、ざよめく女中とりぐの、中に交る山城が、機嫌上戸も腰元の、膝にもたれて、「ヨウくくく、春の始の福大黒、打ちにつこりのほつとり風、男たらしのすつばより、可愛らしいは此三橋、こんく九獻の折も幸ひ大黒舞、所望々々」とせり立てられ、早格氣する女氣の、唄大黒舞を見さいな、悪性大黒見さいな、一に色有る顔付で、二につこりお笑

ひ顔、見れば見る程腹立ちの、四つ餘所の色取りに、五つ因果な見初めて、無性に可愛い其中は、
 連理の契りとわしや思ふ。福大黒見さいな。「ホ、おめでたうござります」と、頭巾を取
 れば賤の方の召使、名も八つ橋の器量美し、御傍に手をつかへ、「今日の御供に外れしより、思
 ひ付の大黒舞、お恥しや」と袖おほふ。賤の方興に入り、「チ、それも自を慰めの爲、嬉しい
 ぞや」と御仰せ。山城はもぢくと、思ひがけなき八つ橋に、見付けられたる此場の時宜、赦
 せ赦せも目顔で知らせ、「我等は寺へ御出の様子、申入れん」と立上り、住持の方へ急ぎ行く。
 跡へのさく歩み來る村上左衛門義清、直では行かぬ面魂、賤の方と見るよりも、御傍につ
 と寄り、「今日はへお出の様子承り、御跡慕ひ某が申上けたき一通、八つ橋もよつく聞け、
 主君北條氏時、賤の方のお姿に迷ひ、明暮千々の物思ひ、餘り見るめもいたはしく、申上ぐる
 も憚ながら、彼方のお心一つにて、氏時様の悦びは、外へは行かぬ御身のため」「黙れ村上、
 脇妻妾と言ひながら、義晴様の胤を宿せし自なれば、いはゞ主従」「ア、其御了簡小さい。
 主にもせよ、家來にもせよ、國家の政道治め給ふ氏時公、日陰者と言はれうより、北の方に成
 るのはお嫌か。コリヤ八つ橋、其方向いて計り居すとも、われも共々お勧め申せ。又われには
 おれが首だけ、思ひは同じ戀の媒、何と嫌か、ア、いやでは有まいが」と、纏れかよれる咽

の下、髭顔ぴつしやり、立退く八つ橋、「コリヤく逃けても逃さぬ」と、しなだれ廻る後の方、折よく歸る山城が、走寄つて腕もぎ放し、「コレ村上殿、御酒機嫌知らねども、女を捕へ、さりととはく不行儀千萬、ちと御嗜みなされよ」と、いふに八つ橋小氣味よく、「お前の戻りが遅い故、夫はく」「モウよいく、委細は聞いた、何の村上殿が無理おつしやらう。ナウ義清殿、定めてそれは座興でがな」と、知つても知らぬ直江が風情、義清も底氣味悪く、「ナニ賤の方様、未だ御參詣なさらずば、某御供仕らん。直江殿には是にて御休息」と、何がな追従の方、「過つて改むる義清が今の一言、只何事も見ず聞かず、八つ橋直江は此所にて自が下向を待ちや。供は村上皆の者、サアくおぢや」と立ち給ひ、行くも一人が戀中を、それと推して本堂へ、打連れてこそ詣でらる。跡は嬉しき八つ橋が、見かはす目元渡りに船、首尾好い逢瀬と抱付けば、「ア、嗜みやく、一つ館に居りながら、たまに逢うたか何ぞの様に、若輩な人では有はいの」「イエく何ほ其様に言はしやんしても、懐しいは女の癖、奥へ通ひの長廊下、情らしうて屹としたその殿振を思ひ初め、逢ふも千歳の縁結び、かうじくて五月の、兒を宿した中ぢやもの、戀しうなうて何とせう。人に計り物思はせ、憎いお方」と山城に、こほす涙は戀の淵、「サアく道理ぢやく、わしとても其方の事、可愛うなうて何とせう。どうで其方に

お暇給はり、誰憚らず女夫ぢやと、いはれるが互の樂しみ、無事で安産する様と、神佛を祈つてゐる」と、聞く嬉しさは百倍の、心ときめく八つ橋が、「ちよつとく」に山城も、下地は好なり御意はよし、手を引合つて乗物へ、無理に伴ふ折からに、早御下向と供廻り、出るも出られぬ八つ橋が、内と外とに氣遣ふ二人、「乗物參れ」と村上が、指圖に心得腰元が、明けて恠り戸をばつたり、あせる山城、吞込む左衛門、「コレサ腰元衆、御乗物を明けたり鎖いたり、エ、聞えた、コリヤ其内に何者ぞ居るに極まつた、イデ改めん」と立寄るを、賤の方暫しと留め、「最前ちらりと見し所、此乗物を目蒐け逃込んだは慥に難鳥、よし何にもせよ、其儘で連れ歸り、詮議は館でナウ山城」と、此場の難儀を助くる情、直江が心の悦びは、割つていはねど乗物の内より洩るゝ有難涙、降つて湧いたる子寶の、行末長き下向道、伴ひ館へ三重歸らるゝ。咲分けし、梅と櫻の花よりも、爰に咲かせし室町の、庭も玉敷く奥御殿、義晴公の北の方たをやめ御前、身は本妻の儘なれど、君の寵愛淺からぬ、賤の方の懷妊を、御身にかへて御介抱、勞はらるゝも勞はるも、何れ劣るぬ品容、「イヤ何八つ橋、今朝から賤の方様の、お顔持が悪い故、殿様にもことなうお案じ。心がかりは昨日の供先、若しや怪我でもなかつたか」と、尋ねに兎角答はへ、我身の戀にからまれて、言ふもいふせき胸の内、思ひを察して賤の方、「今に初めぬたをやめ様

のお心づかひ、嬉しさ餘る願詣、何の怪我がござりませう。夫はともあれ、あなたは定まる御本妻、賤しい此身を上に立て、結構過ぎた御挨拶、やつぱりどう仕やかう仕やと、仰つて下さりませ」「是はあられもない、自殿様に馴初めてより、今において子を儲けず、朝夕祈りし甲斐ありて、お前にお胤を宿されしは、取りも直さず我子同然、殊に左孕は御男子のしるし、足しろの御世繼と、思ふ程猶あなたが大切、悋氣嫉妬は姫御前の、習ひといふも下々の、思ひ違ひし詞の裏、よしなき事を苦に病んで、若しもの事があつては、大事のお身のさゝはり、最前から間もあれば、コリヤ八つ橋、奥へ伴ひお慰に、琴の組でも、ついまつでも始め、お心を引立てよ」と、残る方なき御恵、伏拜む手に降る涙、何といはでの苔の露、臺らぬ底の水鏡、磨き合うてぞ入りにける。己が權威に案内せず、明くる襖もあらゝかに、入来る北條氏時、我慢の鼻も立烏帽子、御座の間に畏まり、「見ますればお女中ばかり、晴信も景勝も、未だ出仕致さぬかな」「テ、誰ぞと思へば氏時、知らせなければ何時の間に見えたやら」「イヤ御存じなくても此氏時、勤むる所はきつと勤むる。それに何ぞや、在番で候ふなどと、人前作る知行盗人、某同然に思召す北の方のお心入れ、いかに結構さばくとて、白い黒いのわかちもなく、御前様とはいはれますまい。誰憚らぬ御身にて、不斷お妾を上にな立て、大切になさるゝ程、却

て御身の敵となる、賤の方の心底、黒い眼で見抜いて置いた、斯くいふ中も心がかかり、早く館を遠ざけ給へ」と、口から出次第言廻せど、敏き御身は何もかも、呑込む奥より腰元ども、「殿様の召しまする、いざ御入」といふ汐に、帳臺深く入り給ふ。義清の二字を守らぬ村上左衛門、はちくり返つて打通れば、氏時聲かけ、「ヤレ待兼ねし村上、サアく近うく」に額際、つき合ふ計に座をしめて、「昨夜しめし合せし通り、心をかけし賤の方、奪ひ取るは今宵の内。表門へは人目もあり、かねて用意のあの抜井戸、釣出す工夫もして置いた。この上望むは晴信景勝、不和なる中を幸ひに、二人へ焚付け同士打させ、甲斐も越後も我領分、親子とは言ひながら、謙信が胸の中、某が思ふ所存もあれば、邪魔にならぬはかの一人、心かかりの晴信景勝、仕舞うて取るが上分別、其片腕は村上義清」「ハア仰までもなく、存じの通り某も、元は信濃の領主なりしが、晴信謙信に切り取られ、其許の情によつて、主従の約をなせし上は、再び信州へお歸しあらば、此上もなき拙者が悦び」「ホ、我望達せし上は、元へ納むる信濃の領主、氣遣ひあるな」と氏時が、當なき國の切取咄し、後に聞人のあるぞとも、知らず思はず見合す顔、「ヤア長尾三郎景勝、出仕致さば案内して、ナゼ奥御殿へ通らぬ」と、てつべいひしぎにちつとも動ぜず、「ホウこは北條殿の仰とも存ぜず、出仕の時はまづ人並の所にあ

つて、其後奥へ通るが作法」「ム、然らば其方は最前から」「イヤたつた今何もかも」「イヤ何が何と」「イヤサ、お二人のお咄の終る所へ参りかより、御挨拶もそれ故延引。御兩所御苦勞千萬」と、寄らず障らぬ景勝が、落付く詞に落付かぬ、破れかぶれと義清が、切付くるをかいどり、「ヤウ何科あつてお手討に」「イヤサ、謙信が子とは知りながら、つひに是まで手練を知らず、武藝の試み少しの差出」「ム、拙者が手の内試みあらば、など尋常の勝負もなく、子供童の切合同然、卑怯至極の左衛門殿、お望みあらばお相手」と、言はれてせき立つ村上が、廣言憎しと又切る刀、鐔元むずと引摺み、「是非知りたくば腰骨に、覺えられよ」とどうど投け、膝に引敷く途端の拍子、切込む氏時受けたるさそく。北の方の聲として、「天晴頼もし三郎景勝。武藝の試み、氏時も義清も、見やつて嘸や本望」と、それといはねどしら化の、無念を鞘に納むる兩人、挨拶もなく立つて行く。「イヤなう景勝、其方の父謙信は、日外より上洛せず、様子あらんと思ひの外、近々に上京との噂、我君にもお待ちかね」と、仰せに三郎頭を下け、「親謙信が不行跡、御怒の色目もなく、慕ひ給はる有難さ、親子が面目是に過ぎじ」と、詞の半へ小姓ども、「出仕の様子聞し召し、早う呼べとの仰付でござりまする」「ほんに自とした事が、お待ちかねに氣が付かなんだ。晴信の出仕にも程はあるまい、サア、此方へ」と奥深き、主も家來

も芳^{かん}しき、花の大紋^{だいもん}たぶやかに、御前^{ごぜん}をさして入りにけり。言葉^{ことば}しがらむ唐糸^{からいこ}の、心も直江^{なはえ}山城^{やましろ}に、繋^{つな}がる縁^{えん}の縁傳^{えんづた}ひ、「八つ橋^{はし}か」「直江^{なはえ}様^{さま}、逢^{あひ}たかつた」と取付^{とりつ}いて、跡^{あと}は詞^{ことば}も雙方^{さうほう}が、抱^{いだ}きしめたる障子^{しやうじ}の内^{うち}、「八つ橋^{はし}殿^{どの}八つ橋^{はし}殿^{どの}」と、呼^よはる聲^{こゑ}にびつくりし、駈^かけ入るこなた山城^{やましろ}が、袂^{たもと}にすがれば、「これははしたり、あれ程^{ほど}女中^{ぢやうちゆう}が呼^よんでるに、マアく行きや」と振切^{ふりき}る袖^{そで}、「エお前は賤^{しづ}の方^{かた}様^{さま}」はつと赤面^{せきめん}直江^{なはえ}が手元^{ても}、じつと引寄^{ひきよ}せ顔打^{かまづ}ちながめ、「見ぬ唐土^{もうこ}は知らねども、此日^{このひ}の本^{もと}を尋^{たづ}ねても、又とあるまい男振^{おとこぶり}、女のなづむ風俗^{ふうよく}を、見る度^{たび}ごとに色勝^{いろまさ}る、峯^{みね}の楓葉^{もみぢは}心あらば、たつた一言^{ひとひし}可愛^{こはい}というてたもいの」と、寄添^{よりそ}ひ給^{たま}へばちやつと飛退^{とびの}き、「イヤ御座^{ござ}興^{きよう}も事^{こと}による、御前^{おまへ}様^{さま}は誰^{たれ}あらう、左大臣^{さだいじん}義晴^{よしはる}公^{こう}の北^{きた}の方も御同然^{ごどうぜん}、殊^{こと}に主人^{しゅじん}景勝^{かげかつ}へ預置^{あづけ}かれし御身^{おんみ}の上^{うへ}、見付^{みづ}けられたら一大事^{いちだいじ}、眞平^{まへいら}御免^{ごめん}」と、立つを引止^{ひきと}め、「スリヤ何^{なん}の様^{やう}にいうても」「不義^{ふぎ}はお家の堅^{かた}い御法度^{ごはつど}」「ム、夫^{それ}程^{ほど}堅^{かた}い御法度^{ごはつど}を背^{そむ}き、八つ橋^{はし}とはなぜ抱^だかれてねやつた」「エ、それは」「サア斯^かういへば表向^{おもてむき}、知らぬで濟^すませし昨日^{きのふ}の供先^{どもさき}、恩^{おん}を思^{おも}はぬ其方^{そなた}の胴^{どう}欲^ほ、わしが願^{ねが}ひの叶^{かな}はぬかはり、八つ橋^{はし}と不義^{ふぎ}の様^{やう}子^す、我君^{わがきみ}へ申上^{まをさ}ける」「ハテ滅相^{めつさう}な、それおつしやつては二人^{ふたり}が命^{いのち}」「それ程^{ほど}怖^{こは}くば、わし任せにしてサアおぢや」と、無理^{むり}に引つばる一間^{ひきま}より、「不義^{ふぎ}者^{もの}見付^{みづ}けた、動^{うご}くな」と、聲^{こゑ}あらよかに義晴^{よしはる}公^{こう}、刀追^{かたなお}取り出^でて給^{たま}へば、續^{つづ}いてかけ出^で

る北條氏時、直江が鬢引摺み、緣板ににじり付け、「言語道斷僧くい不義者、縛首討つ、覺悟せよ」と、言ひも切らせず、「イヤなう其人に科はなし、心をかけしは自ばかり、よきに計らひ給はれ」と、覺悟の體に御大將、「身が手にかくる、觀念せよ」と、振り上げ給ふ刃の下、「ヤレ待ち給へ」と、たをやめ御前、賤の方を押圍ひ、「イヤ申し我夫、一朝の怒に其身を失ふとは、よくも御存じありながら、酒に長じ色に迷ひ、善なる事も惡と見て、御成敗なされては、國中に人種はござりますまい。賤の方の不義放埒、誠と見せて實でない事、此たをやめが見ぬいて置いた。サア打明けて給はれ」と、仰せも涙の顔を上げ、「御推もじの上は包むに及ばず、過ぎし比よりお目に入り、義晴公のお妾と、持てはやさるゝ其内に、君のお胤を身に宿せど、御怒の色目もなく、様々の御勞はり、胸に釘針刺すごとく、お志が切なさ故、何にも知らぬ山城之助、無體な戀を言ひかけしも、不義者の名を取つて、君の御手にかゝらん爲、こらへて下され直江殿。恩と義理とに此命、捨つるは更に惜しからねど、よしない腹をかりそめにも、足利の御世繼と、敬はるゝ子を持ちながら、闇より闇に落すかと、思へど返らぬ我覺悟、情は却てお家の仇、一旦御不審かゝりし上は、只いつまでも不義にして、自ばかりを殺してたべ、頼上げますく」と、洗ひ上げたる心の實、眞實見えて道理なり。やゝ有て義晴公、「チ、さうなうて

は叶ふまじさりながら、我胤を宿しながら、今死んでは彌たをやめに義理立たず。髪は剃らね
 ど尼法師、我愛著も是限り、身をば大事に平産せよ」と、打てかへたる御仰せ、落付く賤の方
 方も、今こそ晴るゝ悦びは、産まぬ前から若殿の、安産ありし心地せり。かゝる折から取次の
 侍罷出で、「西國方の武士と申し、御献上物持參致し、次に控へ罷在る、通し申さんや」と伺
 へば、「御献上とあれば苦しいない。早く通せ」と氏時が、下知の詞に賤の方、直江引連れ立ち給
 ふ。待間程なく白洲の内、袴の肩もきつとせし、眼中鋭き術有る人相、何かしら木の臺の物、
 悲しくもさし置きて、恐れ入りてぞ平伏す。「ヤアいつに見馴れぬ其方が、我君に御献上とて、
 怪しき一品、まづ汝が生國は何國、假名如何に」と尋ぬる氏時、「ハア某は井上新左衛門と申し
 て、即ち生國は薩州種が島の住人なりしが、故あつて浪人致し、何卒昔に立返らんと、心ばか
 りははやれども、頼むべき主君もなく、無念の年月を送る所に、不思議にも此賜我手に入りし
 は、天道未だ捨てざる所、誰彼と申さんより、恐れ多くも義晴公を主君と仰ぎ奉らば、武士の
 面目これに過ぎじと、罷登りし新左衛門、君命じて召す時は、駕を待たずして行くと申せば、
 憚も顧みず、召に應じて御前へ推參、執成願ひ奉る」と、頭を下けて述べにける。大將一々
 聞し召し、「性根を見込み、召使ふ筋もあらん。シテ其方が持參の物、如何なる益に用ゆるや、

語れ聞かん」と仰せ有る。「ハア、是れこそ異國において鐵砲と異名を呼び、玉を仕込んで放す音雷霆のごとく、當る事速にて、戦ひに用ひる第一の兵器なりしと聞いたるばかり、未だ此地にて見ざりし所、即ち先月六日の夜、烈しき難風吹起し、大船小船いふに及ばず、中にも唐船と相見え、種が島の浦にて破損せしが、濱邊に残りし此鐵砲、持參致せし奉公始め、今よりはを手本として、戰場にて用ひ給はゞ、敵は残らずみなごろし」「ホ、左程の徳ありといへど、用ゆる事を知らざれば、取得ざるも同じ事、さいふ汝が其鐵砲、遣ひ様存じてをらば、我目通で傳授せよ、早くく」と義晴の、仰にはつと新左衛門、辭する色なく手に取り上げ、君に向ふは、憚あり、不禮は御免」と立直り、慙と後を見せたる手の内。「コレく御覽せ、斯くも構へし火蓋の所、さす敵と見るならば、まづかうあれ」と引鐵に、どうと響きし大藥、狙ひ外さぬ義晴公、うんとばかりに息絶えたり。是はと驚く諸大名、「ソレ遁すな」と下知に連れ、取りまく家來を事ともせず、薙ぐり立てたる鐵砲の、手竝に恐れ寄付かねば、夫の敵と北の方、てうと打つたる長刀の、刃むねをけつて蹴上ぐれば、隙さす付入る石突にて、落ちたる鐵砲見やりもせず、巧も深き拔井戸へ、飛込む跡は亂口、心亂さぬたをやめ御前、「君の亡骸奥の間へ、敵の詮議は此鐵砲、逃隱るとも遠くは行かじ、四門を固めて取逃がさぬ、手筈を定め知らせの鐘、

氏時早う」とかひくしく、仰受けつぐ次の間へ、走入るより相圖の鐘、響に連れたる御殿の内、法螺貝太鼓に手を合し、挑燈松明一時に、四方八方圍みしは、遁がたなき有様なり。かゝる騷の奥庭より、目ばかり出した大男、賤の方を引立出で、駈け行く後に三郎景勝、「曲者待て」と呼はる聲、心得眉間に打込む手裏劍、遁るゝ曲者強氣の三郎、無銘なれども小柄の手裏劍、是を證據に一詮議と、逸足出して追つて行く。襖をさつと武田晴信、君の大事と心も空、勢ひ込んでかけ來れば、引續いて薙髮の僧、「長尾入道謙信、只今上洛仕る」と、不和なる中は物をも言はず、かけ入らんとする一間より、氏時向うに立塞がり、「在番の武田晴信、君御落命の場處へは参りもせず、納め過ぎた出仕顔、めつたに奥へは通さぬ」。謙信とても左のごとく、子故にかゝる身の疑ひ、行方知れざる三郎が、脱捨置きし素袍の烏帽子、御殿に置くは武士の穢、焼捨てて仕舞はやれ」と、わくる詞も一物二物、三方論議の折からに、北の方たをやめ御前、鐵砲携へ出で給へば、皆々敬ひ奉る。「珍らしや謙信、思ひ寄りざる我君の御最期より、總て疑ひかゝるといへど、取分けて武田長尾は兩執權、天下の政道も執行ふ身を以て、久上洛せざりし越度。又大膳太夫晴信は、今日に限つて出仕の怠り、日比の不和も我君を、人知れず害せんと、疑ひかゝる兩人を、其儘に差置いては、女ながらも身の誤り、心に覺えない

にもせよ、此場の大事にはづれし不運、自は元より、諸大名の疑ひ晴らす思案が第一、源家の忠臣土佐坊昌俊、偽りに誓紙を書き、誠を見せたる七枚起請、それは誰しも間々あるならひ、是はそれに事かはり、本心曇らぬ胸の鏡、磨立てたるしるしがなうては、身の上の曇晴れず、家を立てうと立てまいと、面々の返答次第、サアく何と」と北の方、彼方此方を思ひやり、わつと泣きたい所をも、泣かぬはさすが大將の、奥ゆかしくぞ見えにける。理の當然にさしも二人、下ぐる額のしわよりも、眉に寄る浪胸に滿ち、暫し詞もなかりしが、何思ひけん武田晴信、すんど立つてかたへなる、紅梅一枝はつしと切れば、謙信も劣らじと、烏帽子の眞中さつと切る。晴信御返答申すも恐れながら、昔が今に至るまで、惡事に與し家國を望み、叛逆無道の名を取るも、子孫に残さん爲ばかり。それに引きかへ某が胸中、花物いはねどまつそのごとく、一子勝頼が首討つて、御覽に入るゝが身の言譯「ホ、謙信とても斯くの通り、悴景勝が行方を尋ね、善惡たりとも首討つて、御渡し申す證據の烏帽子」二人勝頼にも、景勝にも、心を残さぬ我々が、北の方への申譯、此上にも御批判あらば、仰聞けられ下され」と、雙方詞かはさねど、割符を合せし忠義と忠義、たをやめ御前涙ながら、「テ、心底見えたる此二品、かけがへもなき兩家の繼木、花を惜しまぬ心の誓言、是に上ぐす事あらうか。其所存を見る上は、最早

勝頼景勝を、殺すまでもにも及ぶまじ。猶此後は自が、力と頼む晴信謙信。此鐵砲こそ詮議の種、あつばれ敵を討ちおほせ、君の御無念晴してたも「ハ、、、、發明なれどもさすがは女儀、當座遁れを誠と思ひ、殺すなとは不覺々々、餘人は格別此氏時、いかにしても吞込まぬ、花と烏帽子に譬へし悴、ぜび首討つて出すべし」と、何がな支ゆる邪智倭奸、たをやめ暫しと止め給ひ、「諸大名の鑑となるべき古老の臣、一旦番ひし詞は金鐵、などか偽りあるべきぞ。偽り飾る所存ならば、其儘にて歸さうや。さりながら、假令潔白立つるとても、我君の三回忌、追善供養終るまでは、蟲けらの命さへ、夫の爲には助けもする、況んや科なき二人の命、殺す基も敵のゆくへ、何卒三年が其内に、尋出さば助ける二人、夫も叶はぬものならば、討つて出すも世の掟、我身の掟は此通」と、二世と兼ねたる黒髪を、根よりふつつと押切り給へば、晴信烏帽子かなぐり捨て、「君の一字を蒙る某、姿ばかりは主君の供」と、指添抜いて髻拂ひ、「形をかゆれば名も改め、今より武田入道信立と法名し、心はかはらぬ以前の晴信、忠義に忠義を重ねしと、思ひ込んだる一生の浮沈、膽にこたへし敵の在所、雲の裏に隠るゝとも、天地の間は獄屋の内、御心慮易く思召せ」と、我子の命黒髪も、切つて捨てたる勇僧の、其名も武田信立と、云傳へしも理なり。氏時ほとんど笑壺に入り、「ホ、左程の性根を見せずんば、謙信晴信とは

いはれまい、敵の在所知るゝまで、我は都に押止まり、君の亡骸取納め、政道糺す身が役目、よもや違背はあるまい」と、己が悪事を白洲の内、身の誤りに山城之助、しをくとして手をつかへ、「賤の方を奪はれし我等が越度ゆゑ、主人景勝へ疑ひ掛りし申譯」と、刀の柄に手をおくる。「なう待つてたべ直江様」と、八つ橋も轉び出で、「不義は二人が誤りなれば、お前ばかり殺しはせぬ、わしも俱に」と死覺悟。謙信聲かけ、ぐつと睨付け、「八つ橋と不義の様子、忤が方より聞くやいな、勘當と申置きたれば、主従でもないうぬらがむだ腹、五十、百、切つたとて、かゝる大事の爲にならんや。うろたへをらば逆礫、兩人共に出てうせい」と、口と心は裏表、情の勘當有りがた涙、早退出と長尾入道、「君を害せし面體は知らねども、惡逆千里に響かせし、此鐵砲こそ囚人同然、某きつと預り置き、詮議の工夫は胸にあり。先夫まではおさらば」と、鐵砲提け立上れば、信立も諸袖に、禮儀は述べても顔と顔、不和なる良將勇將の、中を隔つる北條氏時、底意を見抜く北の方、浮む涙も手向の水、別れくゝて歸りける。夫婦も返らぬ御殿の名残、是非もなくく立出づる。村上左衛門義清、横田兵内諸共に、手の者引具し立ちふさがり、「ヤアどこへく、義清が心をかけたる其女、此方へ渡さばよし、異議に及ぶと目に物見せん、何とく」と呼はつたり。「ヤア怖くもない義清風、如何様に吹かして

も、身動させぬ大事の女房、主君もなければ遠慮もない、指でもさよば撫切」と、八つ橋かうて突立つたり。「物な言はせそ、討取れ」と、拔連れく切つてかゝるを事ともせず、夫婦諸共拔合せ、切立てられて村上左衛門、命が大事と逃行く跡、打合ひ切あふ刀の光、電光石火の間もなく、殖立てく、三重殖立つれば、残る大勢立つ足なく、頭わられて血は瀧つせ、逃廻るのを横なぐり、兵内隙さす後から、「直江やらぬ」と切る刀、ひらりととはづせば思はずも、家來を袈裟に切付けたり。これはと驚く兵内が、首と胴との生別れ、心地よかりし事どもなり。邪魔は拂ひし嬉しやと、悦び歎きの數々も、思ひは七重八つ橋が、渡りを得たる女夫連、サア此上は賤の方、再び廻りあふみ路や、敵もいつかはみの尾張、果は駿河の富士よりも、名高き君の御最期を、悔めど更に甲斐越後、不和なる中もみちのくの、直なる直江山城夫婦、忠義は代々に岩清水、清き流の木曾川や、夜半に紛れて出でて行く。

第 二

恵は四方に隠れなき、下諏訪の神垣は、下照姫の御神にて、靈驗あらたにまします故、近國の貴賤、歩みを運ぶ賑はひに、きねが小鼓神樂歌、神慮もさぞと知られける、殊に今日は卯月の

初、御神事の宵宮とて、商人、百姓、草刈の小童まで、お千度、お百度、絶間なき其中に、車
つかひの簀作、馬場前に車引捨て立寄つて、「ホ、ウ皆近在の知つた者ども、太郎よ、丑まよ
能う参つたな」「チ、簀作、遅かつた」簀「さればおれも上諏訪まで、油粕つけて行て草臥果て
た。ちつと休んで跡から往の」と、神前の大石に腰をかくれば、「コレ」簀作、其石は明神様
の力石とて、其石に腰をかくれば、其豪い石を上げねばならぬ」簀「サアさうぢやけな、けれど
神は見通し、見て見ぬふり」「そんなら休んで下向しや、後に逢はう」と別れ行く。是等も同じ
車遣ひの悪者ども、宵宮参りに肩臂を、いかつ聲で、「コリヤ簀作、わりや此神前の力石の事知
つて居るか」「ほんにさうぢや、たつた今も子供等がいうたけれど、あんまりしんどうさに忘
れてひよつと」「イヤ忘れたとは言はれまい、昔から當社のならはし、腰をかくれば叶はぬ簀作、
ナア勘八、九介」「チ、權六がいふ通、其石上げい、上げにや宮へ斷つて、明神様のお神酒代を
上げるか、サア」どうぢや」と、石の手詰に簀作が、「知つて居ながらおれが龜相、二人三人
かゝつたとて、地放しもならぬ力石、どうぞ皆が沙汰なしに、下内で」「イヤ濟されぬ、上げね
ば宮へ引きずつて行く」「チ、さうぢや、日比から女たらしで、生じらけたしやつ面、踏に
じつてこませい」「サア立て」「動け」と兩手を引つぱり、せちがふ折から、武田家の奥家老板

垣兵部、供人引連れ參詣に、此體見るより家來どもに引分けさせ、「始終の様子聞いたるが、社法を背きし不届とな、併ながら慈悲第一の御神なれば、法に行ふにも及ぶまじ。爰は身どもが義作とやらんに成りかはつての詫、コリヤ若い者ども、侍が詞を下ける、了簡してとらせやい」

「サアお侍の詫なれば、了簡したいものなれど、宮の掟が」「サア其處があるによつての詫、身は信立の家來、畢竟わいらは義作が訴人なれば、我領分へ連歸つて、訴人の科にきつと行ふ。サア何と了簡するか、否といへば言分あり」と、氣色かはれば三人が、「ア、申し、夫程におつしやる事なら、お宮守へは沙汰なし」と、言ふに悦ぶ義作、「何方様が存せぬに、お詫なされて下されて、有りがたう存じます」と、手を合はすれば、「テ、禮には及ばぬ、其代には、其方へ少し頼みたい事がある、旅宿まで来てくれまいか」「是はく、由縁かよりもない私、お詫なされ下されて 忝い。たとへさうなくとも、お侍のお頼、身に叶うた事ならば、御用の仔細、此處にて仰せ下さりませ」「テ、それは過分、去ながら、こゝは社内、參詣も多ければ、身が旅宿へ同道して、密々に咄したい。事によらば隙取らう、さう心得て大儀ながら歩んでくれうか」「何がさて何所までも」「来てくれうや、重疊々々。家來ども、義作を同道せい」と、かへりまうして板垣兵部、旅宿をさして立歸る。「エ、義作めをゆすつて、酒買はさうと思うたに、いはれ

ぬおさむが挨拶で骨折損、もう此上はやけの勘八、權六、九介も、鳥井前で目で一杯やりかけう。サさ来いく」と鼻唄で、鳥井の前へと急ぎ行く。夕暮時は参詣の、人も途絶えて神前の御燈の光森々と、神寂渡る其景色、年も漸十七か、八ちく草履も足輕に、見ゆる所體もほととり風、武田の腰元濡衣が、何か願ひは鳥居より、かざす榊に數取つて、お百度参り大麻も、引手に神や靡くらん。跡から憎い風俗の、大道はたかる鳥居先、信心しら砂踏付けた、懷手して神参り、「姉さん能う参らんすの、おれも明神せぶりに來た、お百度の連になりやんしよ」「是はマアく、どなたか知らぬが、幸な道連、最う日も暮れかよつて、女一人は心細い」「さうであるく。自體マア日暮から、大膽なけんさい様ぢや。マア一度、鳥居から百度は大儀、姉様しんどか、手を曳こかえ」「ハテしんどいとして大事の願、身をこらさいで好いものか」「ム、身をこらすとは戀である」「イエくそんな事ぢやない」「それなれば好い著物が、欲しいといふ願ではないかや」「何をわつけない事ばかり。さうおしやんすお前の願はえ」「おれが願は商賣の四つほ、此間腐り續け、さしばかりになつたから、思ひ付の百度参り。如何様、姉様の足の輕さは、よくくの願ひと見えた。コリヤ連立たるものぢやない、其様に歩かしやるので、ア、好もしいもとの邊がすれませう。マアそろく歩いておれが言ふ事を聞かつしやれ。

いろ事ことでなくばおれとはどうぢや。ア、味あじいこしつきぢや」と、とんと叩たたけば、「チ、笑止さうし、大
 事じのくお百度ももに、惡魔あくまをさして貰もらふまい。耳みみに諸もろの不淨ふじやうを聞いて、心に諸もろの不淨ふじやうを聞か
 ず。祓はらひ給へ、清きよめて給へ」と、から手水てうず、「コリヤけうけうとい神道しんたうつかひ、堅かたい所ところが奥おくめかしい。
 コレ神様かみさまは粹すぢや、ついちよこくと叶かなへ給へ靡なびき給へ」てんがういはすと信しんを取つて、祈いのる
 功德くどくの神かみよりは、跡あとから口説くどく神様かみさまもほつと草臥くたびれ、「チット待まちつたり、チ、しんどやく。佛ほとけの
 顔かほさへ三度さんどといふに、神様かみさまのお百度ももは、足あしも腰こしも拔ぬけ果はてた。ちつと休やすも」と大石おおいしに、腰こしをか
 くれば濡衣ぬれぎぬは、一心しん不亂ふらん、是こゝで丁ちやうどお百度ももの、數かずも大方おほかたまを麻あ、大願だがん成就じやうじゆなし給へと、伏拜ふくはい
 み引ひく鈴すずの綱つな、切きれて落おつれば濡衣ぬれぎぬが、胸むねに當あたりし案あんじ顔がほ、横藏よこざう傍たはへ立寄たちよつて、「コレ何なにとさ
 しやつた姉様あねさん」「サイナ私わしがお百度ももは、大だい事じのくお主様しうさまの命いのち乞こひ、鈴すずの綱つなの切きれたのは、お命いのちの
 ないと云いふ、明みやう神様じんさまの知しらせか」と、涙なみだぐめば、「エ、氣きの弱よわい、さすがは女子をなご」と鈴すずの綱つな、手
 に取上とりあげ、「こなたの命いのち乞こひするお主しうは、男おとこか女をんなか」「アイ殿達どのたちでござんす」「それなら吉きつ左さ右う、此
 鈴すずの綱つなに書かいてあるは。十七歳さいの男子なんし息災延命そくさいえんめいとあるからは神かみも納受なふじゆ」「それはマア、お嬉うれ
 しや、お主しうのお年としも丁ちやうど十七じち」「チ、よし。此この鈴すずの綱つな持もちていんで戴いたかさしやれ」「ア、成程なるほど、
 好よいお方かたにお目めにかよつて、お命いのち乞こひの願ねが成就じやうじゆ、重かさねて御縁ごえんもあるならば此このお禮れい」神かみに願ねがひのか

ひの國と、詞殘して鈴の綱、押戴いて濡衣は、嬉しさ足も地に著かず、悦びいさみ立歸る。横藏は跡見送り、「餘所はない命でさへ、神の納受で生きるのに、生きる事はさて置き、胴取りやくさる、はればかゝれる、もう今夜の資本がない。是からは明神様をおれが仲間の胴頭にして、此箱の賽錢を胴錢、マア試に神様を相手にして、三つほの廻りして見やう」と、ぐわらりと打明け、「オ、さくで是程あれば、今夜の資本は樂々。サアマア神様から振らしやませ」と、張るも投けるも我一人、三つほのさいをめつたほり、「おつと神の四苦八苦、一廉は立棒で受けます。是からおれが親の番、サアく神様張らしやませ。ハ、アびり十にねだ切お出でか爰を一番當てたいが、南無骰子明神なり給へ、當り給へ」と、ほいと投ぐれば、でつくの「サア仕てやつた」と、攫へる賽錢、「神様も一文な、是からは拜殿、燈籠、神樂太鼓、なんなりとかたを見ねば錢貸さぬ。譬へ貸しても、正直をおもにする神様なれば、よもやぶさは打たしやるまい。負けたと思うて神腹を立てさしやんな、全く我等暗骰子は遣かやせぬ。イヤはや、どういうたとて、あへんと一つ打たしやれぬ、結構な神様」と、錢のありたけ財布へねち込み、「コレ盗みやせぬ、相對づくで勝つた錢、勝ちついでに何なりと、せしめてくれん」と、邊うそうそ、欲の眼に見付ける太刀、是幸ひの一資本と、拜殿に駆け上り、潜の鐵物捻切りく、己

がせしめる奉納の、太刀脇ばさみ駈出す向ふへ、長尾の家來落合藤馬、供人引連れ追取廻し、
「最前より窺ふ所、御主人の奉納の太刀、盗取るには仔細ぞあらん、白狀させん」と飛かよるを、
引つぱづして拔手も見せず、首はころりと落合藤馬。スハ狼藉と取りまく家來、博奕打には似
合はぬ横藏、薙立てく追うて行く。折から出合ふ長尾三郎、人音太刀音心得すと、窺ふ足元
落ちたる首、御燈の光に能く見れば、家來落合藤馬が首、ハット驚き邊を見廻し、思案廻ら
す横藏は、血刀提け立歸り、心がかりは以前の首、後日の邪魔と暗がり、さがせば景勝聲を
かけ、「汝が尋ぬる心の一品、今神前で某が、拾ひ取つてコレこよに」と、差出す首を見て
悔り、返答一句も先へは出でず、跡に家來がばらくく、「奉納の御太刀を盗み、落合殿まで
殺せし曲者、最早遅れぬ百年め、腕を廻せ」と追取りまく。「待てく者ども、眼前の家來の敵、
身が手にかけん」と社燈の光り、顔つくくくと打守り、落合藤馬が首討つたる手の中、多勢を相
手に薄手もおはぬ力量を持ちながら、盗賊と聲をかけられ、刀を投出し、誤入つたる面付は、
まんざら理非の辨ない奴でもない。こりやおのれ出来心ぢやな、武士の家來を手にかけれし憎
い盗賊、只今成敗すぢやつなれども、命は助けた」「エ、すりや御赦免下さるゝか」「チ、長尾
三郎景勝、身が手を下して討つべき首は、天が下に一つか二つ、己ごときに目はかけぬ。此社に

一七日參籠の大願、いまだ満てざる内なれば、一命を差赦す、餘人にかやうの狼藉せば忽ち絶命。面魂に見所ある奴、性根を改め、其首の胴に付いてあるやうに、慎しみをれ」と和らかに、生れ付いたる大名風、供人引連れ悠々と、心残して立歸る。「ア、ひやいな事、命一つ拾うた。是から博奕場へ行つたとも、此ふまんでは埒が明くまい、一服呑んでいんでこまそ」と、力石に腰打ちかけ、摺火燧取出し、信濃烟草をすつぱく、すつぱの車遣者、どやくと社内に入り、横藏を取廻し、「わりや此力石の法知つて居るか」「チ、知つてゐる、此石を上げる覺があつて、腰かけたが何とすりや」「ハ、くくく、己に hands 觀音の手があつてもならぬく。石はさて置き、おいらが相手になつて見よ」と、兩方より小腕取ればぐつと捻上げ、「あまい事すなやい」と、右と左へ踏みのけ蹴のけ、後へ取付く勘八が、首筋擱んで引廻し、宙に提け二人が中へ人礫、こりやたまらぬと三人が、面も體も砂まぶれ、はふく廻けて立歸る。「エ、弱い奴等が、力石々と仰山にぬかせども、手毬程な此小石、まつと居つたら上げるのを見せうに」と、兩手にひん抱きかるぐと、ぐつと上げたる石の下、穴を穿つてぬつと出る、白髪交りの有髪の老人、身には菅簀異相の體。さしもの横藏ぎよつとして、下界の人か仙人かと、顔をながむるばかりなり。「若者力量見届けた、此一巻に血判せい」「ム、此地の底を住家にし

て、人をためす心の底、問はねど聞かねど、大望ある人と見た。品によつたら頼まれませう、が此横藏も、其許様の器量を見立て、頼みたい事がござります」「ホ、ウ小賢しくも申したり。主従は一體、主は家來を頼み、家來は主を頼むならひ、汝が頼みの仔細は如何に」「即ち是に」と、懷中より一巻を取り出し、「老人是に血判がして貰ひたい」「ハテ思ひ合つた頼ぢやな、汝も」「御邊も」「かはらぬ大望」「身は其方を家來にする氣」「身どもは御邊を家來にする氣」「どちらへどうとも決せぬ中は、胸中を卷込んだ此一巻、滅多には打明けられぬ」「此方とても此胸の中、開かぬ中に返事が聞きたい」「身が返答より其方が、住所は何國、ソレ聞たい」「イヤ只野山を住家とすれば、住所としては定らず、とどまる所は天が下」「ム、面白い、よし所在は聞かずとも、一旦我目にかゝつた上は、雲の裏でも尋ねさがし、味方に付けるは折があらう。天が下を志す汝が望も、某と同腹同性、我も定めぬ旅の空、志す方は六十餘州、雨宿りする天が下、人目を凌ぐ、雨具をくれん」と、著たる菅簀ぬぎ取つて、「七重八重花は咲けども山吹の、みの一つだになきぞ悲しき。重て逢はう」と投げやれば、「ム、天晴餞別、受けました。手前も寸志の置土産、返辨申す」と力石、ぐつと引上げ投付くれば、心得たりと受留めて、「慥に落手仕る」「ホ、ウ御邊の力量も試み申して先安堵、再會々々」再會するは此簀を、印にあふは七重八重、

とふの菅簀打ちかたけ、さらばくと諸共に、口にいはいはねど胸と胸、知らせ合うたる曲者ども、別れてこそは三重立歸る。死は武士の常ぞとは、常の詞と思ひ子に、今ぞかゝれる甲斐國、武田入道信立と、身は釋門に入りながら、武門花咲く庭の面、落葉かく助はく兵衛が、ひきずる箒打水に、いとど館はしめやかなり。「何と角助、何かは知らず昨日から、一家中がひそくと、夜の目も寐ずに走廻る、其譯は何だと思へば、京の大將義晴様とやらを、誰とも知らず殺したけな。それで國々の大名衆が、イヤイヤおりや殺さぬ、知らぬといつて潔白を立てられたけな。そこでおらが旦那も、其潔白を立てると言つて、それで館が騒ぐけな。其潔白といふ物は、どんな物だそちや知らないか」「何だ潔白をわりや知らないか、イヤこいつ文盲な奴ではある。潔白を立てるといふは、おらが小半酒を立てると同じ事で、潔白振舞と云つて、お大名には節々ある事。おらもちよこく潔白喰つたが、中々輕くてうまい物。したが鰯汁と同じ事で、當てらるゝと命がない。わいらも命が惜しいなら、誰が潔白を立てべいとも、必ず喰ふな」と物識自慢、とつても付かぬ下々の、咄も物のしらせかと、戻りかよりし濡衣が、聞いて案じる胸撫でおろし、「コレく二人の衆、下としてお上の取沙汰、わしが聞いては大事なけれど、若侍衆の耳へ入つたら、こなた衆の爲にならぬぞ。掃除が濟んだら勝手へござれ」と、聞いて悔り

頭かく助とちめんほう、おらは何にもしら洲をはく兵衛、箒かたけて逃けて行く。「よしなき事に隙取りし、さぞ奥様のお待ちかね、濡衣只今歸りし」と、一間に向ひおとなふ聲、「チ、濡衣か、さぞ苦勞」と、障子ひらいて常磐井御前、思ひなき身の思ひ子を、思ひ侘びたる御氣色。濡衣此方に手をつかへ、「上々様に苦はないものと、思ひの外勝頼様のお身の上、降つて沸いたる御災難、お案じは理様、達者なお身でもある事か、お目の悪い若殿様、もしもの事があるならばと、思へば身も世もあらぬ悲しみ。悲しい時の神祈りと、諏訪明神へ参りしも、今度の御難儀免れさせたび給へと、重き願ひも叶はぬ告か、切れて落ちたる鈴の綱、思はずはつと取上けて、能くく見れば勝頼様の、お年に違はぬ命の釣緒、十七歳の男息災延命と、書いてありしも神のお告と、嬉しさ餘る鈴の綱、是見給へ」と取出し、見せるも見てもうち莞爾、「チ、それは嬉しや悦ばしや。切れて落ちしも和女の眞實、神も納受ましめて、勝頼が身にさよはりない、諏訪明神の御神託。是に付けても京都の武將義晴公、何者とも知れず、飛道具を以て害せしより、諸國の大名心區々、我人心疑ひ合ふ。中にも夫信玄に疑かよる身の言譯、一子を切つて出すべしと、契約ありしは武士の意地。されども御前のお情にて、君三廻忌の其中に、敵の在所知るよならば、勝頼も助けよと、深き恵の立つ月日、早三廻忌も事濟めど、今

において敵も知れず、今日に縮まる我子の命、何とせん方なき中に、ナウ持つべき者は忠義の家來、板垣兵部我を招き、お氣遣ひし給ふな、勝頼公に寸分違はぬ御身がはり、兵部が存じて罷在れば、今日中に連れ歸らんと、館を出でしが妾が樂、それ故兵部の歸りを待てども、昨日にも昨夕にも、今に於ていなせのないが、心がかりにありつれど、神のお告に何疑ひ、兵部の歸りも頓てであらう。そちも案じな濡衣」と、御悦びの折からに、お側仕が手をついて、「御上使として、村上義清様お越なり」と、聞いて奥方涙ながら、「早上使のお入りとや、心當の兵部も戻らず。ハアイヤこれ濡衣、和女は次へ往て休息しや。上使への返答は自が胸にある。サアいきや。ハテ立ちやいの」と、仰せに否とも濡衣が、是非なく一間へ行く跡へ、のつさくと入來る、上使は聞ゆる村上義清、疊ざはりも荒くれ武士、いかつがましく座に直る。奥方遙に手をつかへ、「甲斐と信濃は國ならび、其信濃にござつた村上殿、今は遙々都より、御上使とは御苦勞」と、いふに村上打點頭き、「成程以前は隣國の好、心安う致せしが、夫は内證、只今は上使の役目、仔細申すに及ばず、信立とくと合點の趣、勝頼の首お渡しなされ、受取らん」と、事もなけなる上使の權柄。「成程其儀は夫信立、わらはに申付置きし故、兼て覺悟はしながらも、今はの際に是がマア、悲しうなうて何とせう。親子此世の一世の別、心用意も致させたい」ヤア首討つに何の用意、手

間隙なしの無雜作に、拙者がたつた「一打」と、立上るを押留め、「斯様申さば武士の、身にあるまじき卑怯者、未練者とも思さうが、何を包ん勝頼は、諏訪明神の申子にて、神に御苦勞かけ奉り、儲けし子なれば私に、殺すも神へ恐れあり。勝頼が命、元へ戻し奉ると、諏訪明神へ代參を立てたれば、せめてそれが歸るまで、暫くお待ち下されかし」「ヤアあまぢやらな、其代參何時戻らうやら知れざるを、べんくだらりと待つ事ならぬ」「イヤさのみ夫程隙取るまじ。還うて今日の暮までは」「ヤア此永の日を待つ事叶はぬ」「然らば未の上刻まで」「夫も叶はぬ」夫ならせめて二時の、用捨は武士の情ぞや」「ハテ雜魚鰯を直切る様に、何のかのとどびつこい。夫程延べてほしくば、暫しの用捨はしてくれん」と、庭に飛下り垣根の、引きみしつて床の間の、花生へ捻込み押込み、「コレ此僅の萎むまでは宥免致す、花がしほむとそれが寂滅、いやと言はさぬ割符の一本。先それまでは奥で休息、御馳走には信濃蕎麥、お手打が我等好物、花鰹より勝頼の首、早く賞翫致したい。イザ奥の間へ案内」と、いふに否とも、僅の、日影待つ間の命ぞと、思へば胸もいた垣が、早う戻つてくれかしと、夫を心の力草、村上を誘うて、一間へこそは入りにける。始終の様子物かけに、聞いて袂もぬれ衣が、今は恨みを、に、いはん方なき憂身やと、聲をも立てず忍び泣、洩れ隔てたる唐紙を、明けても明かぬ目なし

鳥、無慚なりける姿にも、武士の角立つ角前髪、袴の裾も長廊下、探る刀の手前さへ、面目もなき其風情。「ナウ勝頼様か、おいとしゃ」と、縄り付いて泣居たる。「一筋な女氣に、悲しいは道理々々。只因果なる我身の上、適弓馬の家に生れ、弓矢打物取る事さへ、叶はぬ不具と成下り、此儘無念な死をせんより、侍らしう腹切るが、弓矢神への身の言譯、此比母の物語、其時覺悟は極めて居れど、不具になつても子の命、助けたう思召す母上のお心づかひ、無下になすが勿體なさに、今まで命延ばはれども、今村上が使者の様子、聞いてはどうも生きては居られぬ。目界の見えぬ勝頼を、大事に思つて長々の世話、いかい苦勞をしてたもつた。嬉しいとも過分とも、禮は未來でく」と、跡は得言はず見えぬ目に、涙を隠すいぢらしさ。濡衣わつと聲を上げ、「恨めしい勝頼様、此館へ奉公に、來初めた日からお姿を、可愛らしいと思うたが、縁と因果の初にて、お主様とも御主人とも、辨へ知らぬ拙い筆に、心のたけをいは本の、神の結ぶのお情に、嬉しい枕をかはした時、未來までもとおつしやつた、其お詞が誓紙ごと、楽しんで居るものを、お前ばかり死なうとは、慘いつれない、胴慾」と、身をとんと勝頼の、膝に打臥し泣沈む。「テ、其恨は尤なれど、親の許さぬいたづらなれば、どうではかない花の縁、もう謹もしほむ時分、隙入りては恥の恥、泣かずと其方は次へ行きや」と、早切腹と見

えければ、「ア、申し、まだ 權はしほみは致しませぬはいなア。いき／＼と今を盛のお身の上、切腹とは情ない、どうぞ助ける仕様はないか」と、止めても止らずせり合ふ中へ、母はかけ出で、「チ、よう止めてたもつたなう。最前來りし使者の様子、聞いて覺悟は 理なれども、そなたを助けうばかりに、心を碎いて居るはいなう、母が心を無にするのか」「ハ、アこは勿體なき御詞、須彌大海に比べても、及びがたなき母の 大恩、さら／＼無下には致さねど、權の限りの命、隙取つては使者の手前」「イヤ苦しいない 大事ない。そなたに寸分違はぬ身がはり、慥にあると板垣が、館を出でしは昨日の朝。スリヤもう戻るに間もあるまい」「イヤ申し奥様、板垣殿が其身がはり、連れてさへ歸らるれば、勝頼様のお命に、さよよりはなけれども、若し又それが違うては」「夫も分別して置いた。濡衣そちや勝頼と不義してゐるな」「エイ」「いや呵るではない此母が、今改めて女夫にする」「エ、すりやあの賤しい私を」「チ、賤しうても貰うても、女は夫を大切に、思ふが直に氏系圖。目界の見えぬ勝頼を、身にかへて大事にかける、如才ない氣を見込んだ故、大事の子なれど其方に預ける、連れて此家を立退け」と、思ひがけなき詞に恠り、「アノ勝頼様を」「合點がいたか、花がしほむと悲しい別、早ういけ、疾う往け」と、いふ中若しや 權の、しをれやせんと伸上り、見やる花より見る母の、姿

しをるよばかりなり。勝頼は氣色を正し、「コハけしからぬ母人の御仰せ、死を恐れて館を出でなば、後の嘲り家の恥辱、武士の命は義によつて輕しと申す。只初より亡き身ぞと思召し諦めて、命のお暇給はらば、猶此上の母の御慈悲、お願ひ申し奉る」と、命惜しまぬ健氣さに、いとどせきくる涙を止め、「スリヤ此母が是程に、心を碎くに承引せず、腹切るか。もう此上は止めはせぬ、われより先に此母が自害」と、指添押取れば、あわてとどめる濡衣に、又取りするむざんの目病、「申し母人、段々誤入りました、お詞に随ひ此館を」「スリヤ聞分けて落てくれるか。」「濡衣も其心か」「アイく、必ず聊爾遊ばされて下さりますな」「ホ、聞分けてさへたもれば母も嬉しい。斯ういふ中も心せく、サアく早う」と勤められ、是非もなく立出づれば、「ヤア勝頼を落さんとはのぶとい巧、村上が見付けたからは一寸も動さぬ、爰へ引出し一討」と、かけ寄る先に立塞がり、「コレくく、權のしほまぬ中に討うとは」「ヤアしほまぬかしほんだか、脈の上つた死人花、是でも生きるか生きて見るか。サアくどうぢや」と、權の花を目先へ突付けく、突付けられて常磐井も、何とせん方なき身ぞと、思ひ切つて突込む刀、「ナウ悲しや御切腹」と、叫ぶ濡衣、驚く母、「ヤレ早まつた生害」と、二人左右に取付いて、前後正體なき沈む。勝頼苦しき息をつき、「申し母人、お詞に背きし段、眞平御

容赦下さるべし。是までの御養育、御慈深かりし身は盲目の淺ましや、軍慮に秀でし家に生れ、戦場のかげ引叶はず、遠矢はもとより打物は、漸刀を杖につき、我家の内を探廻る、甲斐源氏の嫡流たる、武田四郎勝頼と、言はれる是が武士か、よくも武運に盡果てしと、思へば此身に倦んじ果て、今日や切腹、明日や自害と、毎日々々刀を手に、取上けは上けながら、思へば深き母の之恩、我先立ちなば亡き跡にて、さぞ御歎き御物思ひ、逆さまな追善供養、受ける不孝の勿體なく、存へ在りし今日只今、親子の縁もあさがほと、共に散り行く御名残。ヤイ濡衣、我最期を歎かずとも、母に力を付け奉れ。さは言へ、目界の見えぬ身を、朝夕心の樂しみに、暮した其方が胸の内、不便や便もあるまじ」と、涙吞込む手負の苦しみ、見るに悲しさ濡衣が、「ついで假初のお障より、見えぬ御目をあけ暮に、苦に病み給ふがおいとしく、どうぞ御目の明く様と、御符御札もあらゆる神、跣足参りのお百度にも、叶はぬのみかお命まで、今を限りとなつたるは、神も佛もない事か」と、涙の限くとき立て、くとき立つれば奥方も、「かかる憂目を見まいたため、心盡した兵部さへ、今に歸らぬ恨めしさ、思ふに違ふ憂世や」と、手負にひしと抱き付き、流涕こがれ伏沈む。「ヤア聞きたくもないよまひ言、早首刎ねてくれんす」と、刀するりと拔放せば、「なうコレ今が別れか」と、悶える奥方濡衣が、歎きとどむを

押退け突退け村上が、振り上ぐる刀の下、手負は合掌、ぱつしり立切る生死の境。かゝる事ともしら洲の内、あやしの辻駕えいさつさ、跡に續いて板垣兵部、老の心もせき立つ足元、「ヤレレどめつさうな旦那殿、マア一里ぢや、マア半道ぢや、急げ〜と息もさせず、上の諏訪から十七八里、夜通しの早追、極の駕賃、お心付はお心次第、結構さうな旦那殿、酒手も定し結構な、お金すつかり下さりませ」と、汗押拭ふ其中に、兵部は切戸の鑿しつかり、「駕代もくれう、酒手もくれう、此方へ來れ」と遣り過して大袈裟切。「ナウ悲しや」と逃出す相肩眞二つ、二人をしとめる刀の音に、恠り驚く駕の垂、開けて逃出る義作が、「ア、申し、私は御領分に住む百姓、博奕は打たず喧嘩は嫌ひ、成敗にあふ科はない、御赦されて下さりませ」と、齒の根も合はず顫ひる。「ア、音高しく、御身の上に氣遣なし、必ず騒ぎ給ふな」と、座敷へ伴ひ窺ふ中、奥方一間を轉び出で、「ヤレ板垣か、遅かりし」と、跡は涙に取亂す。「ホ、さぞお待ちかね。併し御用の品も首尾よく調ひ、只今同道、御悦び下さるべし。奥様、申し常磐井様」と、いへど答もなき入る母、「ハテ心得ぬ御有様、何にもせよ、委細の譯もおつしやらず、泣いてござつて事済むか。勝頼様は何處にござる」「テ、其勝頼に逢はしてくれん」と、首提けて立出づれば、「ヤア、こりや若旦那の御首。すりや早御最期遂けられしか、ハア、」

はつとばかりに腰もぬけ、胸も張裂くうろく眼、「拙者めが心當の事あれば、たとへ如何様の事ありとも、必ず聊爾の出来ぬ様と、申置いた兵部も待たず、天にも地にも懸替なき、大事の若殿殺して仕舞ひ、泣いて濟むか悔んで濟むか。エ、言ひ甲斐なしとも、胴慾とも、いうて返らぬ此有様。いたはしや残念や」と、拳を握り齒を嚙みしめ、五臓を絞るばかりなり。「ヤアごくにも立たぬよまひ言、泣きたか緩りと跡で泣け」と、首提けて村上は、旅宿をさして立歸る。跡見送つてうろくと、身の納りをみの作が、「申しお侍様、私はもうお暇申します。マア人に何の合點もさせず、何やら好い事がある、おれ次第になつて居いと、無理やりに駕へ捻込み、連れてこつた此屋敷、さつきにからの様子を聞けば、私を身がはりにするのぢやけな。何所の國にか滅相な、人の首を斷なしに切らうとは、慘い氣なお侍様。畢竟身がはりが遅なつて、間に合はなんだりやこそあまの命。ヲ、どうやら思ひなしか、首筋元が冷りする。ヤレヤし怖や恐ろし」と、ぞと髪立てて立出づれば、「ヤア一大事を知らせ、其分に歸されず。不便ながらも覺悟せよ」と、切込む刀かいくどり、鰐元しつかと片手に握り、「ハテ身代を遣うたといふではなし、正眞の首渡したを、誰が知つたと何の大事。そしてマア人の命を澤山さうに、瓜か茄子切る様に。お赦しあれ」と突放され、「ヤア土ほぜりに似ぬ不敵者、彌助け歸されず」と、

又切付くれば身をかはし、無刀のあしらひ手練の切先、危く見ゆる後の障子、兵部が髻ぐつと引寄せ二刀、さすが痛手に七轉八倒。こはそも如何にと常磐井御前、障子さつと引明くれば、血刀さけて信立公、悠々然と立ち給へば、はつと奥方簀作も、身を謙り恐れ入る。信立一間をしづ立出で、「勝頼が最期にも出合はず、今又兵部を手にかけてし某が所存の程、嘸常磐井の不審ならん。ヤアゝ濡衣、言付置きし物はやく持て」ハツト答へも涙ながら、夫の血汐に染なす片袖、なくく御前へ指出せば、信立御手に取上げ給ひ、「十七年の春秋を、我子と思ひ暮されし勝頼こそ、夫なる兵部が實の悴、御身と我が血をわけし、悴といふはあの簀作、改めて親子の對面致されよ」と、思ひも寄らぬ詞に悔り、「スリヤ腹切つた勝頼は我子でなく、此簀作が眞實の」「チ、其證據は此血汐」と、御佩刀の血片袖に、押しあてく押しぬぐひ、「是見られよ此血の、外へも散らず合體せしは、紛れもなき親子の血筋。十七年以前勝頼誕生せし砌、其板垣も一子を儲く、其子が面ざし我が悴と、似れば似る物生寫、見分け難きが彼奴が惡念、人知らぬ間に摺りかへ置き、己が悴を主人と崇め、主人の胤を我子となし、己が手にも育てずして病死と偽り、信濃の國の片邊へ、一生不通にやつたる事、天眼通は得ざれども、卽座に知つたる此信立。憎き逆心、一分だめしと思ひしが、今戰國の時にいたつて、人の子を我子とし、我

子を他家に育つるは、智謀の一つと奥にも語らず、不通にやつたる其先へ、我手を廻して育てし簀作。慮の圖をはづさず、主となしたる己が子に、自然とかゝる今日の災、因果の廻り來るとは知らず、己が忤が身がはりに、大恩請けし主人の子の、行方を捜して連歸り、又殺さんとはかる人外め、國賊とやいはん人而獸心、天の御罰思ひしれ」と、扇を取つて丁々々、はつたと蹴するし信玄の、詞に知つたる我子の身の上。當かゝる野心の者とも知らず、忠義一途の侍と、思うたが面目ない。それに付けても此簀作、信玄様の御子とは、知つてか但し知らずにか」勝其儀は我を育てたる、乳母が疾より物語。又父上にも是までに、忍びくの御對面」當スリヤ稚い時より百姓の、家に在りしも父御のお指圖。とは言ひながら系圖正しき武士の、弓箭の業は目にも見ず、身は鋤鋤の泥まぶれ、憂にやつれしその姿、今改めて親子の對面、衣類大小早々持て」勝「まづ暫く」と押しとどめ、勝京都の武將義晴公、敢なく討たれ給ひしより、父を始め諸大名へ、疑かゝる今此時、夫故にこそ勝頼に、腹切らせしも父の言譯。いまだ立つとも立たぬとも、知れざる中に某が、又勝頼と立歸らば、彌疑ひ一身に、とどまり難き此館。身を民間に育つを幸ひ、此身此儘簀作」と、白洲へおりて簀と笠、世に降る雨は凌けども、我身にかゝる横しぶき、洩れて姿もぬれ衣が、始終を聞いて覺悟の刀、隙さすとどむる強氣の

手負、刃物たぐつて我腹へぐつとつき立て引廻し、「ア、恐ろしきは天の照覽、主人の罰。信玄公の仰せ一々違はぬ我惡心、悴を國の守とあがめんと、子故の闇に眼くらみ、くらみくつて悴が眼病、藥祈念も叶はぬ筈。勿體なくも御主人を、害せんとせし大罪人、逆隣にも行はれず、大將の御手にかゝる有難さ。コリヤ濡衣、此館の御重寶、諏訪法性の御兜、今謙信の手に入りたり。汝も信濃生れとあれば、今の命を存らへて、何とぞ國へ立歸り、手立を以て兜を奪取り、勝頼公へ奉らば、親と一つでない悴、死後の言譯此上なし。申し奥様、お赦しあつて此願ひ、お聞届下さらば、生々世々の御厚恩」と、伏拜んだる四苦八苦。不便と奥方濡衣引立て、「大惡人の兵部なれども、それには染まぬ勝頼が孝心、知らぬながらも親子となりし縁あれば、濡衣を親里へ返すがせめて手向草」「ホ、尤なる母人の御計らひ、兜の事も捨置かれず。今腹切つて死したる勝頼、親と一つでない言譯、忠義の仕様は濡衣が、心次第」と死を止める、詞にさすが死なれもせず、「御意に隨ひ法性の御兜、命にかへて取りかへさん」「ホ、あつぱれ出かした。此義作、猶も姿を下賤に扮し、義晴公を討つたる敵、草をわかつて尋出し、其時こそは勝頼と、立返つて御對面」と、早立出づれば信玄聲かけ、「義晴公を害せしは、四海を望む叛逆人、中々容易き敵にあらず。特に手練の飛道具、いまだ日本へ渡らぬ兵器、譬ていはどまつ此

通り」と、用意の鐵丸、車輪の如く投付け給へば、すかさず笠にてひらりと受留め、「火に徳のある物は水に徳なし、諸葛臥龍が工夫の地雷、火玉飛びちる術ありとも、我方寸にも大河在り、何かは以て恐るべき。未だ日本へ渡らぬ鐵砲、それこそ究竟詮議の手がかり、尋出すは瞬く間、追付歸り簀作が、身の納りは其時々々」そのときは井に濡衣が、暇申すも涙にて、物の黑白もなき夫に、似たる菖蒲や杜若、花紫の明方は、盛と見えし、慥も、今は名のみぞ勝頼の、御手へ頓てとり兜、花にもなせし惡業の、ありて其名は鬼薊、因果は廻る日車に、のりの此身と絶え入る兵部、不便と見やる信立は、仁あり智ある勝頼に、名残おく方女郎花、桔梗刈萱秋の野の、月に名をふる更科や、信濃路さして出でてゆく。

第三 三

名も山深き信濃路に、優しき花の名に呼びし、此處ぞ桔梗が原とかや。甲斐と越後の領分に、わけて立てたるさい目の場所、秣を刈りにやつこらさ、一本きめた刀より、研立て鎌でぐわつさぐわさ、踏みあらしたるめいぐが、主の威光をかり場の領、是も同じく二人連、籠に枅を指荷ひ、見てびつくりのどつてう聲、「ヤイ下司め、うらが部屋では、ついに見た事もないしやつ

面ども、誰に斷り、此秣を刈りほした。悪く言譯ひろいだら、二人共に首が飛ぶ、盗人めら」と言はせも立てず、「ヤア下司の口から下司呼はり、しやらくさい。忝くも甲州の主、信玄公のお馬の飼料、うぬらが知つた事でない、すつこんでけつかれ」と、猶も引きぬく手先を捉へ、「ヤイ此標が目に見えぬか、甲斐の領分は是より東、西は越後領分と書いてあるは、うぬらが眼にかゝらぬか。盗人というたが誤りか。サアく何と」ときめ付けられ、返答こつより後から、握り拳を二つ三つ。「ヤア傍輩をぶたれては、後日に主君へ言譯立たぬ」やぶれかぶれと二人の奴、いども争ふ折こそあれ、「兩人共にしづまれ」と、聲うちかけの裾けはらし、高坂彈正が妻の唐織、越名彈正が女房入江、夫と指圖に腰元ども、用意の腰かけおく家老の、女房と見るより下部ども、別つてこそは躡る。入江邊に心を付け、「誰ぞと思へばお厩の沓藏、百内、何故の争ぞ、事によつては聞捨てられず。包まず語れ」と尋ねれば、「ハイく、喧嘩の元は馬の飼料、信玄殿の家來とぬかし、此方の領地へ踏込み、刈りあらせし狼藉者、我々に見付けられ、言譯なさの揃合」と、語る中より「もうよいく、それでさつぱり様子が知れた。國がかはれば心まで、かはればかはる、甲斐の國はすべて盜賊はやりしと、人の噂も嘘ではない」と、あてこすられて唐織も、むつとはせしが押ししづめ、「互にお主の確執より、おのづと隔た

る兩家の中、家來の仕落は幾重にも、お詫申す筈なれども、只今のお詞に、すべて甲州には盜賊ありとおつしやつた、其一言が承りたい」「テ、唐織様とした事が、何の根問に及ぶ事、も此信濃は村上左衛門義清殿の領地なりしが、謙信様と信玄様兩人して切取り給ひ、此所にさいめの印、それを知りつゝ狼藉せしはあなたの御家來、國の守の扶持人さへ是ぢやもの、ましてや町人百姓は、猶以て狼藉するは知れた事」「イヤおつしやんな、印ありとは言ひながら、一つに續きし原なれば、過つて踏越えしも、いはゞ下郎の刈取る草」「イ、ヤ下郎にもせよ、誰にもせよ、其過をさせまい爲、建てたる樺木は國家の禁制。花咲く木々の枝とても、折取るまじと記せしを、手折れば即ち落花狼藉。此領分の印に限らず、たとへ白紙に書くとても、事を制する理に等しく、是皆國の教にして、掟を守るは貴人より下々の掟とする。謙信様の息のかよつた領地へ踏込み、草一筋でも刈取つたは、國を盜むも同じ事、其儘に指置いては、夫彈正の越度、女房の身として見て居られず。高坂様はともあれ、私が夫彈正殿、ついに一度も名を穢せし事なければ、お前の殿御と一口には、ほんに言うても下さんすな」「コリヤ面白い聞所、お前の殿御が執權なら、私が夫も執權職」「イエ、そりやお前の胸一つ、深い様子は知らねども、侍衆の口癖にも、高坂様は辻彈正、こちの夫は鑑彈正、人に勝れた鑑の上手と、辻

足早いお侍とは、異名さへ違ふもの、まして心の内外も、違ひやんす」とほのめかす。「イヤコレ入江様、武士の身は情によつて、退くも逃けるも軍のならひ」「チ、好い口な事おつしやるな、情でそんな異名を取る、武士の法がござんすか」と、いはれて唐織當惑の、何とせんかた此場の無念、廣言憎しと思へども、入込んだ越度といひ、夫をさみする詞の端、聞くにつらささいやまさる、涙隠して「入江様、花によそへ名に顯はし、非を改むるお前の存分、かへす詞も家來の仕落、今は此儘歸るとも、滿つれば缺くるの道理にて、今日のお禮は重てきつと」「チ、そりやおつしやるまでもない、私が方に非太刀は受けぬ。此以後主人の領分へ、つゆ程もお障りあらば、二度と赦しは致さぬ」と、残す詞も針の先、真綿に包む唐織が、立寄る所をとどむる下部、是非もなみだの道筋を、左右へこそは別れ行く。爰に信州筑摩郡の邊に住む、慈悲藏といふ者あり、生得親に孝心の、道は昔の郭巨にも、かはらで積る年の數、三十の上は漸と、二つか三つの稚子を、抱入れたる懷の、うち曇なる冬の空、寒さを凌ぐ種ならで、歎の種となりふりも、茫然として佇めり。「ハア誠や人間の吉凶は、生るゝ時の運に任すといふ、母の胎内を出でしより、誕生の祝儀とて、ざよんざ諷ふ悦びは、貴人高位はいふに及ばず、下萬民の我々までも、悦びに悦びを重ねるが親子の縁、夫に引かへ其方は、わづか慈悲藏が忤と

生れ来るもそちが因果、親の心子知らずと、我肌付くれば現なく、結ぶ榮花も夢の夢、頑是なけれど聞いてくれ、親として子を捨つるは、人間ならぬ境界と、笑ひし此身に廻りきて、今といふ今其方を、こゝに捨置く此親が、一人の母へ孝の爲、捨つれば拾ふ神佛の、力のかつて成長せよ。親と思ふな、子でないと、思切つても切りかねる、産の母が歎きといひ、我も不便さ身にせまれど、そちをかばへば不孝となり、孝を立つればそちが難義、理にせまりたる思ひ子を、捨つる此身の孝行より、捨てらるゝおことが孝行、慘いとばし思ふな」と、言譯なみだ目も明かねば、そつと傍に置く土の、上に伏したる稚子が、わつと泣出す聲に胸り抱き上げ、泣くを道理とこゝかしこ、唱山を越えて里へ往た。里の土産の見納めと、抱きしむればすやく顔、さすが童の氣さんじと、打守りく、名は慈悲藏の慈悲もなく、今目前に捨置いて、歸ると知らぬ心根を、思ひ出せば不便やと、いとど涙のやるせなき。「ハア我ながら誤つたり、心よわくて叶はじ」と、包み廻せし絹の香の、思ひは二重胸の闇、元の所へ押直せど、知らぬ子供寢入ばな、一世の別れと縁言を、あとに残してゆき國の、つもる歎と知られたり。かゝる折ふし甲斐國の執權、高坂彈正時綱、供人數多引俱して、當所筑摩の御社へ、詣の道もほう木の傍、件の捨子に目をくばり、人音稀な街道に、捨てられし稚子は、犬狼の餌食は治定、見捨つるも

本意ならずと、家來をとどめ歩み寄り、「ム、最早嬰兒といふでもなく、男子と見えて氣高き寢顔、いやしからざる者の忤、何故こゝに捨置きし、仔細はいかに」と、見廻す小袖の紵紐に、付けたる下札手に取上げ、「何々、甲州の住人山本勘助」と、讀みも終らず不思議の顔色、「此山本勘助といふは、生國は三河の者、山賤と見えて魂は、異國の韓信孔明にも劣らぬ軍者、主人豫て御懇望、かゝる亂世の其中でも、諸方に招く今日只今、此稚子に名を記し、捨てたる主こそ芳しき、勘助を味方に入ると、信立公へよき土産。ヤア／＼者ども、身が屋敷へ連歸れ」と、詞にはつと若黨中間、抱き取らんとする處、「高坂殿暫く」と、聲をかけたる立派の侍、家來につかせし鎧印、長尾入道謙信が郎等、越名彈正忠政、我領分に打通れば、高坂は甲斐の領、ほう木を中にはさみ箱、不和なる中の兩執權、すは事こそと下部まで、固唾を吞んで聞居たる。「イヤなに高坂殿、只今物かけより承れば、是なる捨子が下札に、山本勘助と書付けし故、お拾ひなさるゝ御所存、尤とは存ずれども、見まする所、雙方の領分へかゝり合せし上は、貴殿のまゝにもなりますまい。手前の主人長尾謙信、日比望みし折に幸ひ、其姓名を書表はし此所に捨てしは、某が、願うてもなき忠義の一品、貴殿に遣つては武士が立たぬ。是非連れて歸りたくば、彈正が首諸共。さもない中はいつかかな叶はぬ」「ホ、さい目の論なら金輪際、拾はにや

ならぬ稚子が、踏んだる足は手前の領分「イ、やさにあらず、物の始を頭といへば、此方の領分を枕としたる山本勘助、越後の國の旗大將、見事貴殿は拾ひめさるか」「ヲ、いふにや及ぶ、我方へ踏延したる足元が、肝心要の甲斐の國。高坂彈正が拾うて見せう」「イ、ヤ越名彈正が連れ歸る」「イ、ヤならぬ」と刀の柄、理を非にさせぬ詞詰め、争ひこよに二人の女房、とくより立聞く此場の時宜、見やる眼も角菱の、めいゝ夫を押隔て、高坂が妻威儀繕ひ、「及ばぬ私が一思案、女の差出がましけれど、彈正殿聞かしやんせ。甲斐と越後の領分へ、捨置きし稚子は、兩家に望む山本勘助、是を手筋に召抱へるお前方の胸の内、一方へ拾はれては、是非一方の國の恥、其争ひの基となり、肝心の此子に乳も吞まさず、若もの事があつたならば、お望も水の泡、何にもせよ兩方より、乳房含めし其時に、いづれへなりとも吞付く方、夫を印にお拾ひあらば、どちらにひけも劣りもないと、わしや思へども跡や先、思案してたべ我夫」と、さすが女の智慧の海、實に高坂が妻なりし。「女房出かした、争ひとどむる乳房の鬭取、幸ひ其方が持合はせし、乳をあたへて試せん。彈正殿も相應な乳母でもあらば出されよ」と、入江に當てたる詞の端、聞くよりくわつとせき立つ入江、「おかもじ様の御思案に、鼻毛延した今のお詞、越名彈正忠政が女房、乳母奉公は致さぬぞ。今一言おつしやつたら、赦しはせぬ」と腹立

聲、「ヤイ、馬鹿者、大事を前に置きながら、無益の舌の根動すな。イヤなに高坂殿、負うた子に教へられるとやらで、内寶の詞に服し、女房々々が乳を勧め、どちらへなりとも方を付け、此場の別は如何ござらう」「ホ、そりや此方も望む處、吞むか吞まぬは互の運づく。唐織早く」とすゝめられ、だくつく胸も押ししづめ、抱上ぐれば目をほつちり、明けて三つの稚子が、わつと泣出す口の内、乳房ふくめて賺しても、吞む體さらに見えざれば、見合す夫婦が顔と顔、「コレ申し唐織様、何ほう勧めさしやんしても、子供はどうでも正直な。わしが代ろ」と抱き取る入江、心に拜む神よりも、頼みに思ふ此乳を、たつた一口吞んでたもと、ゆふり歩けどけがな事、猶も正體泣きさけぶ、聲をとめんと手に汗を、握り詰めたるいたいけも、憎やとすねて置く露の、頼みもつなも切れ果てし、入江が思ひ唐織も、残り多さに又立寄り、賺し宥めて抱上ぐれば、泣きやむ不思議女房より、高坂彈正大に悦び、「軍師山本勘助、信玄公の御味方」と、いはせも立てず、「ヤア、くくらくらく」。兩方共に吞付かねば、未だ善惡知れざる中、其方へ連歸る、其譯聞かん」と詰めかくる。「ホ、合點行かすばよく聞かれよ。入江殿が抱上ぐれば、歎くは治定あの如く、身が女房が手に在る中、泣かぬが縁ある是證據。又二つには甲州の住人、山本勘助とあるからは、紛ふ方なき手前の領分。最前ちらと承りしが、越後領へ指ささば、

此後は赦さぬとやら。ナソレ、御内寶の詞もあれば、是とてもまつその如く、稚けれど甲州の町人、其元がお構ひあらば、却て狼藉國賊の、名を取るか彈正殿と、先にかけたる詞の裏釘、折返されてさしもの彈正、返答せき切る女房入江、思へば無念と唐織が、抱きし稚子無理やりに、引取ればわつと泣く。「是は無體な入江様、さつきの喧嘩に負けたるかはり、其子ばかりは叶はぬ」と、あなたこなたと挑みあふ、裳ほらく妻と妻、顔はほのめく薄櫻、亂れちつてぞ爭ふ風情、一度にわくる夫と夫、中にも高坂聲勵まし、「實やいたつて正直は、頭にやどる神の慈悲、一陽の春を待つ、雪中の梅にも優る主君の悦び、此身の忠義」「さればいな、お慈悲深い信立様の御威勢が顯はれて、私が無念もたつた今。サア申し入江様、最前のお詞に、お前の殿御を何とやらおつしやつたが、今一言御所望」と、嘲る女房。「ホ、、聞きたくば名のつて聞けん、長尾入道謙信の郎等、越名彈正鎧彈正」「イヤモ天晴手練の此鎧先受けてはたまらぬ大事の稚子、連れて手前は逃彈正。唐織來れ」と立別ると、胸に一物二人の彈正、こゝに捨子の隨一と、其名も高き山本氏、伴ひ歸るぞ三重ゆゑしけれ。秋の末より信濃路は、野山も家も降埋む、雪の中なる白髪の雪、女ながらも故あつて、男のすなる名を名のる、山本勘助と人毎に、いは間の水の音たえて、木の葉の飴二つ三つ、年も幼氣稚子を、賺すお種が手枕に、寢兒が守

は何所へ往た、山の薪をえいさつさ、さらば爰らで一休み。「お種女郎冷えますの」「チ、正五郎様、戸助様、吹雪で外は歩かれまい。お茶も沸いてござんす」「イヤ／＼構ふまい、子持は手が放されぬ。慈悲藏殿は留守か、今日も今日と、寄合ふとあの人の噂、お袋への孝行は申すも愚、兄への深切、ほんの子は次にして、兄貴の息子の其次郎吉を、大切にしらるゝ女夫の衆の心意氣、名も慈悲藏といふが尤」「サレバイノ、夫に又兄の横藏殿、兄弟とてあの様にも違ふものか、親への不幸さ弟へのむごさ。親兄弟にさへあれぢやもの、村中で持餘すが尤、外を家と出歩いて、隣邊へたどれ込み、人の娘下女婢、當り合に孕まし、其おごもりのあの小忤も、親に似ぬ子は鬼子である」と、口はさがなき山道を、ゆがまぬ武士の梓弓、胸の袋に押包み、孝をはづさぬ慈悲藏が、獵漁も母の爲、流に添うて立歸る。「オ、孝行者お歸りか、佛性な慈悲藏殿、殺生に出られたもお袋への養ひか。夫程にさつしやつても、氣に入らぬあの婆様は、去とはきつい片意地者」「ア、これ／＼勿體ない事いうて下さんな、たとへ身を粉に碎いても、胎内に在るから今日までの親の苦勞、くらべて見れば百分一、あの鳩部屋の鳥でさへ、鳩に三枝の禮ありとて、諸鳥に勝れて孝行な鳥、何處からとも無う此家の軒へ集つて來るも、慈悲藏が心少しは通じ、類を以て集つたかと、思うて嬉しう思ひます」「成程夫はこちとらも、さる書

物で見て置いた、烏は親の養ひを、育みかへすといふ本文。おれが毎晩女房に、孝行にする心が通じて、烏がかあくかゝの顔、いんで見よう」と出でて行く。「母者人は最前から、まだお寢みなされてか、炬燵でお風ひかしますな。お目の覺めぬ其中に、お肴料理して上げん。次郎吉も寢入つたか」「ハイ此子が機嫌よう育つに付けても、氣にかゝるは峰松が事。ほんに兄御の横藏様、いかに我子でないとして、捨てしまへと無理ばつかり。お前が外へ出やしやんと、私を女房にせうの何のと、辛い悲しい事聞くも、お前の孝行立てる爲と、辛抱するにもしられぬは、眞實な子を胸欲な、餘所へやつたといはしやんすが、まあ其先は何所の誰」「ハテ夫を問ふがもう未練、氣遣ひ仕やんな。此貧家に置かうより、乳母に乳母を付ける結構な内へ養子にやつた。彼奴はきつい果報者、もう思ひ出さずと、とんと捨てたと思つて居や。病煩ひといふ事もある、萬一先で死んだら、無い昔ちやと諦めて、己や居る氣ちや」と云ひながら、犬狼の餌食とも、なりはせぬかと子を思ふ、心は一つ一間の中、そつと窺ひ「是はさて、寢入つてござるかと思へば、裏へ出て御氣丈千萬。お炬燵に火もあるか、追付御膳の用意も仕や」と、片時忘れぬ孝心は、又と類はあらし吹く、音も吹雪に高足駄、踏分け尋ね来る人は、長尾三郎景勝、萬卒は求め安く、一將は得がたしと、此隱家の弓取を、慕ひて一人門の口。二重の腰の白

妙に、枝もたわよの雪折竹、杖と我子に助けられ、庭に佇む老女の風情。「申し／＼此大雪に、さりとては冷えまする。蒲團の上にござつてさへ、御老體の身の上、平にあれへ」と取る手を拂ひ、「七十に餘つて愚鈍にはなつたれど、子供に物は教へられぬ。すべて親に仕へるに、起臥の介抱は誰もする、何事によらず、親の心に背かぬ様にするのが誠の孝行、寢てばかり居るも氣詰りさに、雪の景色も見ようと思ふ、母が心を妨けるは、何と不幸であるまいか」「ハ、ア一々誤り奉る、其段には心付かず、お年寄られて一日々々、御氣力の落ちるが悲しく、今日も獵に出で、元氣を養ふ谷川の、ます／＼お達者なる様と、志の棒物、賞翫なされ下されかし」「イヤ／＼、物の命を取り、夫が何の養ひ。眞實親の養ひなら、遠い山川の珍物より、つい裏にある竹藪の、笋を掘つて来い」「ハアそれは御意ではござれども、此寒の内に笋が」「サアある物を取つて来るは子供でもする事、ない物を取寄するがぼんの孝行。斯ういはど母が難題言付くと思はうが、此位の難題に困る様な器量では、智者と呼ばれて、人に知らるゝ弓取にはなられぬぞよ。わらはが夫は天が下に聞えし軍師、一生主人を取らず過去られた忘形見、兄弟の子が器量を見定めるまでは、女ながらも夫の名をつぎ、山本勘助と名乗る此母、二人の内に勘助といふ名を譲り、父の軍法奥義の巻を傳へうとは思へども、夫では中々勘助にはなられ

ぬ」「サア其名跡を受けたさに、心を盡す此慈悲藏」「ソレ／＼、其名がほしさに孝行を盡すは、眞實の孝ではない、上皮的偽表裏」「コレ／＼それはお情ない、苗字を望むも出世して、母人の悦び顔拜みたいばかり。兄者人の心入と一つに思し下さるゝは、餘りつれなき御心」と、雪に喰付き落涙に、老母は猶も腹立聲、「コリヤ何ほ利口に言廻しても、此年月膝元を離れ他國して居て、今日此頃俄の深切、是が偽といふ證據。己が心に引きくらべ、兄を不孝と言ひなす惡心、思へば見るもいまはし」と、杖振上げて打たんとす。老の力みに踏挫く、駒下駄飛んでよろめく足、「コハあぶなや」と抱きとむれば、「イヤ／＼／＼、汝が世話は受けぬはい。そこ退きをれ」と親と子の、心合はざる片足の下駄、景勝隙かさず拾ひ取り、「御召物は是に候」と、老女が前に押直し、しさつて頭を下けらるゝ。母つく／＼と打守り、「人品骨柄只人とも見えぬお侍、賤しい婆々に履物を直されしは、黄石公に杵をあたへし張良が俤、ハテおくゆかしき御方や、お近付にもなつて、とくとお禮も申したい。コリヤ慈悲藏、其方に用はない、立つて行け」ハアはつと、何か仔細はありそ海、母の心を量りかね、是非なく奥に入りける。「いざこなたへ」と請すれば、辭する色なく座に直り、「御推量少しも違はず、黄石公に劣らぬ軍者、山本氏ごしそくめしかの御子息を召抱へて、一方の大將と頼まん爲、身不肖なれども、越後の城主、長尾謙信が嫡子

三郎景勝、是まで參上仕る」と、禮儀正しく述べらるれば、「扱こそく、始より自然と備はる御眼さし。シテ御望みなさるゝは、兄弟の中兄か弟か」「イヤ景勝が望む處は惣領の横藏」「ハテナ最前より御覽の通、孝行な弟慈悲藏をさしおき、不孝な兄の横藏を、御家來になされうとおつしやるお前のお心は」「イヤそりや其方に覺えある事、諏訪明神の社内にて、面體恰好とつくりと見届け置いた横藏、是非に身どもが所望致す」「ム、左様おつしやれば思ひ當る。よくよくに思召せばこそ、大名のお手づから、いやといはさぬ此婆々に、下駄を預け給ひしは、天晴敏き殿ぞかし。兄は只今他行なれど、此母が成りかはつて御家來に差上う」「過分々々。其箱是へ」と取寄せて、「いかに老女、主従となるからは、一命を捨てても忠義をはけむ武士のならひいふに及ばず、此方とても一身を任すといふ、かための一品受取られよ。若違變あらば身の上たるべし」「御念に及ばず、其時は母が皺首差上けるか」「家來にするか二つの安否」「後程々々」「老女さらば」と詞詰、威風鋭き北國武士、越後縮の物なれて、引かぬ其場のしなの路や、別れてこそは歸らるゝ。木曾山木立あらくれて、無法むてつをしにせにて、名も横藏の筋街道、草鞋のひもふり埋む、餌竿かたけて門口より、「母者人今戻りました」と、聲に老母がはやく顔、「チ、兄待ちかねました。此間はマア他處へ行て居やつた」「ハテこなわろは、おれが足でおれが

歩くに、何處へなと飛び次第、飛びついでに戻りがけ、小鳥十羽程捕うと思つて、顔も足も切れる様な「道理々々。サ、ちやつと上りやく」と草鞋の紐、手づから母の慈悲藏も、足の湯を取り機嫌取る。「兄者人お足洗ひましよ」「イヤ、コリヤ、孝行な兄が體に、不孝な弟が手をさへるは穢らしい、母が洗うてやりましよ」と、一人に辛く一人には、甘い女子の鼻の先、泥鰌突付け、「エ、若い女の手のさはるは好いものぢやが、乾物の様な母者の手で、情の罪科ぢや。いか様おれは孝行者、此小鳥も晩の夜食に、こな様に喰はすのぢやない、焼いて貰うておれが喰ふ氣。兎角おれが口さへ養へば、こな様の氣が休まる、なう母者人」「さうともく、あのマア孝行な事はいの。サア、炬燵に火もして置いた」「ム、こな様が今まであたつてゐて何の恩にきせる事。エ、こりやぬるい水炬燵ぢや」「イヤ、あんまりきつい火は上つて悪い」「それがたはけといふ物、もうこなたも追付け火屋へ行く體、稽古の爲にきつい火にも當つて置かしやれ。サア足揉んで下され」と踏出す兩脇、慈悲藏見かね、「ドレ私が」と立寄れば、「又差出るか小癩者。兄や斯うかく」と撫でさする、ほんそ息子のかはびら足、「ア、とてもなら美しいお種がもんでくれりや好いに。ハア貴様子守か、峯松はどうした」「ハイお指圖の通り、思ひ切つて一昨日主が何所へやら」「ム、捨てて仕舞うたか、よい事。一體おりや貴様に惚

れてゐる時に、幸とかゝのそけめはてこねて仕舞ふ、跡に残つた小悴の其次郎吉、邪魔な餓鬼奴、しめ殺さうかと思うたれど、味なもので、子といふものは親よりちつと可愛いものぢや。又大うなつたら、おれに似て孝行にも爲をろかと思つて、貴様に育てさすからは。ナウ慈悲藏、畢竟わがみと相合の子、とても事に女房も相合にする合點。お種顔振らずと、ムンと言やいの。それをいやと言ふと、慈悲藏が大事がる此母者に當るぞよ。コレしつかくと揉ましやれ。エ、まだ火がぬるい」と戀の意趣を、炬燵にあたる非道者、持餘してぞ見えにける。折ふし表に先走、「山本勘助殿に用事あつて、大僧正 武田信玄參上なり」と案内に、思ひがけなき夫婦が不審、仔細あらんと横藏が、起きも直らず空寢入。「ハテ扱思ひ寄らぬ大身のお入り、卒爾には母も逢はれまい、慈悲藏饗せ。コレ横藏、是はしたり、何やらいひく寢入つたさうな、風ひきやんな」と一間の障子、引立て窺ふ表より、匂ふ留木の高坂が、妻と知らせてうづだかき、雪の懷稚子を、抱いて幾重の柴の庵、家來は先へと追ひかへし、行儀正しく打通る。訝しながら手をついて、「信玄公の御入と思ひの外なる女中のお名は」「テ、成程御不審尤、偽りならぬ信玄公の、コレ此寢顔に對面なされ」といふに、女房立寄つて、ヤア峯松か戻つたかと、飛立計の胸押ししづめ、「是はく御苦勞様や、そんなら峯を貰うて下さりましたはお前様か、

いかいお世話様に「コレく、麿相いふまい、甲斐國へ養ふからは、最早一國の世繼、即ち今日の信玄公、孝心深き慈悲藏殿、殊に軍術の達人と聞及び、師範ともお頼みなされん爲、わざわざ見やしやんせ、コレ愛らしい此信玄が抱へに來た、お受申されてよからう」と、恩をかけたる名將の、情は肝にこたゆれど、とほけた顔で、「是はしたり、私は此在所の山賤、鋤鋤の外何にも存ぜぬ者を、軍術の師範なぞとは、勿體ない事おつしやります」コレく、此方の人、お前の器量を聞及んでとあるからは、きつい譽な事ぢやぞへ、卑下するも事に因る。ハテ軍法奥義は、母様の傳授の巻を讓請けて「さればいやい、それを貰うて山本勘助になつたれば、抱へられまいものでもなければ、まだ生もかへぬ中に軍術の大將のと、そりや山の芋を蒲焼にする様なもの、名さへ慈悲藏とて、蟲さへ得踏殺さぬ者が、軍に出て人の首が何として何として」と、とつても付かぬ顔付に、唐織はつと胸せまり、「不調法な女の使、お氣に入らいでおつしやるのか。どうあつても味方に付いて貰はねば、ならぬといふ其譯は、桔梗が原に此捨子、山本氏と有る書付を、印に拾ひ取りは取つたれど、サアどうも力に及ばぬは、肝心の乳に香付かず、なんほ抱いて突付けても、あつちくと指さして泣いてばつかり。此大將に兵糧がなければ命も危し、其兵糧を續ける謀は慈悲藏殿、お前の心にありさうな事。甲斐國へ味方に附いて、

夫婦して守育てうと思ふ心はござんせぬか。此マアちつとの間に、コレ何所もかも細つた事を見やしやんせ。道理でもある、眞實の母御の懷を離れて、他人の手に何の育たう。夜は得寢ず、晝はうつく泣寢入に、寢た顔のいぢらしさ。ほんに見る目が悲しい」と、語る中より女房が、「チ、可愛や、左様でござんせう」と、わつと泣出す母親の、聲に目覺ししがみ付き、縄る乳房は一人にて、子の手柏の二面、儘ならぬこそ恨なれ。一間に母の聲高く、「コリヤく慈悲藏、子供を餌に恩にかけて味方にせんと、後穢い信立に奉公しては武士が立つまい。去ながら、軍法奥義も傳はらず、家の名跡を繼ぐ氣がなくなれば、勝手次第」と、もぎどうに、言捨て障子はたと閉す。ハアはつと立上り、我子を取て引きはなし、「須彌山滄海の大恩を受くればとて、母の恩にはいつかなく。信立に仕ゆる事存じも寄らず、變改申す。コリヤ女房、一旦捨てた此悴に、見苦しい、何ほえる。縁に引かれて知行取つては末代までの名折、親子の縁をさつぱりと切つてしまへば、信立に恩もなく義理もなし。コレ此竹も其本は、竹に雀と離れぬ中、今餌さし竿となる時は、鳥の爲には怨敵、事によつたら親子兄弟、敵味方となるも武士道。お返事は此通、稚子連れて早歸られよ」と、詞銳に言放す。「ハア此上は力なし。とはいへ歸つて御主人や、夫に何と詞さへ」なくく抱き立出る。「コレなう峯松、一世の別れせめてまあ、此乳が

一口吞ひとくちましたい」と、慕したふ女房じむらを引退ひきのけて、枝折戸しをりぎぴつしやり。表おもてにも心は残のこる雪中せつちゆうへ、頑是ぐわんぜなみだの子こを抱だきおろし、襦じゆの下したぐくり、くより添そへたる後紐うしろひも、垣かきに結むすぶは義理ぎりの綱つな、神や捨置すておく竹の子笠たけこがさ、いたいけ頭つひりうちきに打著うちせて、「山本の氏うぢを繼つぐ慈悲藏じひさいざう殿どのを、軍術ぐんじゆつの師しと頼たのまんと、是これまで來給きたまふ信玄公しんげんこう、どうも此儘このままでは歸かへられず、是非ぜひとも味方あかたに付つくといふ一言ごんを聞くまでは、此信玄このしんげんは其許そのもとの門口かきぐちを立ちさらず、雪ゆきに凍こえて死すまでも、爰こゝに座ざをしめ返事へんじを待まちつ、大將たいしやうの命助いのたすけうと殺ころさうと、御思案ごしあん次第だい、よい返答へんたふを頼入たのみいる」と、しづをかけたる雪ゆきの笠かさ、思おもひを殘のこし捨てて行く。「ヤアそんなら坊ぼんはまだ往いなぬか」「コリヤく、門かぎには誰たれもない、よし居ゐてからがあかの他人たにん。今傍いまそばへ寄よるとナ、信玄しんげんの恩おんを受けたになつて、母の一言反古ごんげんになる。此實戸このすぢの外そとへ一寸すんでも出るがいなや、夫婦ふうふの縁えんも是限これぎり」と、腰こしさけの紐ひも、鑢くわを、括くくる慘じささは我われながら、いかなる惡魔鬼あくまおにか蛇じやか、「六韜三略りくたうりやくのそくの望のぞみある慈悲藏じひさいざう、慈悲じひも情なさけも知しつては居ゐれど、母の詞ことばは背そむかれぬ。どうで乳房ちちのうきに離はなれたもの、とてもない命いのち、凍こえて死しなば死しに次第だい。そちもソレ其子そのこを袖そでにしては、兄貴あにきへの義ぎが立たぬぞ。ハア何かに紛まぎれて、大事だいじの孝行かうかう怠おこつたり、ドレ裏うらへ行いて雪ゆきの中なかの筍たけのこ掘ほつて進しんぜう」と、簀笠みのかき取とつて打うちかづき、あつき親子おやこの縁えんをたつ、蹴くふりかたけ、此寒氣このかんきに荒男あらをこでさへたまらぬもの、よたけもない體からだに、ア、子すを捨すつる藪やぶはあれど、親おやの詞ことばは捨すてがた

き、裏の藪へと踏みわけける、雪より先にいとし子の、埋れ死なん不便やと、見合す顔に降る涙、
雲争ふ濡翹、しをるゝ夫の後かけ、「いかに望があればとて、天にも地にも一人子を、能う惨た
らしう捨てられた。今の女中も氣の強い、置いて往ぬ程なら、お家に寝さしていんだがよい。
可愛やくゝひもじからうのに、ちつとの間なと抱たい」と、任せぬつらさ次郎吉を、漸そつと
下に置き、さし足ながら庭に下り、覗けば門にしよんほりと、「ヤレほんよ、夫がマア何と命が
あるもの」と、明けんとすれど鑢に、錠の代りの眞結びは、慘やつれなとあせる程、雪にし
めつて開かぬ戸に、「ちよたいくゝ」も絶えぐゝの、風にうたてや次郎吉が、わつと泣く聲、ハ
ア悲しやと、又かけ戻り抱上げて、「雪やころよん、霞やころよん。こはそも何たる因果ぞや、
此子憎いぢやなければども、我子に乳が吞ましたい。コレちとの間くゝ、寐入つてたもいの」と、
心も空はかきくらし、又降りしきる白雪に、外に泣く聲八寒地獄、劍を吞むより身にこたへ、
思はず知らず轉びおり、碎けよ破れよの念力に、はづるゝ戸より身は先へ、「コリヤほんよほん
よ」と、我子を肌を抱きしめ、流涕こがれ泣く聲に、唐織木蔭をつつと出で、「信玄公を抱上げ、
乳房をふくめ参らすからは、慈悲藏はもはや此方の味方、夫に知らせて悦ばせん」と、勇んで
館へ立歸る。はつとお種も心付き、うろつく隙に何處より、懷劍ちやうど峯松が、肝先貫き息

絶えたり。コハ何事と驚く中、次郎吉引立て横藏が、一間をさしてかけ入れれば、「ム、扱は我子の害になると、横藏の所爲ぢやの。義理も情ももう是まで、敵を取らいで置かうか」と、死骸を小脇にかい込んで、常には弱き女氣も、恨につよき力帶、奥へ窺ふ忍び足、早日も暮に近づきて、鐘かうくの道ぞとて、古き例の跡を追ひ、子故の闇に白妙の、道も涙に見えわかず。なんほ掘つても筭が、あらう様はなけれど、親を思ふ一心を憐れみ、天より授くる事もやと、心に込めて一尺二尺、底はしら羽の鳩一羽、飛んでおりしも飼ひなれし、鳥も心のあるやらんと、又掘りかへせば又一羽、友呼び誘ふ生類の、有様つくぐ打守り、「最早入相、諸鳥塙に歸る頃、一羽ならず二羽三羽、集り来るは、ハテ心得ず。誠や、兵器ある地には鳥群をなすといへり。我父は日本の軍師、此所にて世を去り給ふ。一生暗んじ置かれたる、六韜三略の祕密の巻、此下に埋み置かれしやらん。扱は我孝心天に通じ、鳥類是を知らせしか。ハアありがたし忝し」と、心勇んで掘穿つ、雪も散亂群雀、ばつと立つたる藪の中、窺ふ兄が頼魂、「ム、野に伏勢ある時は、歸鴈行を亂る。油斷の塙を窺ふ惡鳥、殺さうと生かさうと手の内の雀、慥に手ごたへ、此下を」「コリヤ待て慈悲藏、埋んである傳授の一卷、われにはやらぬ。兄が出世の種にするはい」「兄者人そりやお前無理でござりましよ」「サイヤイ、無理いふが兄の威光、阿呆

烏の孝行ごかし、邪魔なうぬから仕舞うて取る」「どつこいさうは成りますまい、苗字を繼ぐは此慈悲藏」「見事われが」「繼いで見せう」「小癩な退け」と鋤と蹴落花みちんの雪とんで、掘出す箱のふたりが争ひ、道と非道の二筋を、滑つつ轉けつ掴みあふ、はずみにがはと取落し、池にざんぶと水煙、さわぐ群烏兄弟も、不思議と見とるゝ後より、障子ぐわらりと母の老女、「兩人待て。兄弟共に武士となり、主人を取るべき時節到来。雪の中の筭を掘出したる慈悲藏、今こそ母が心に叶うた、天晴孝行出かしたく。其方は最前言付た通り、裏口四方に氣を付けよ、ナ合點か」「ハア委細承知仕る」と、駈入る弟横藏は、池中の箱を引上げて、母の御前に差出せば、「サアく兄、そなたには別てよい主を取らする。即主人より下されし、装束も更めさせん」と、しづく奥の白臺に、無紋の社符白小袖、傍に三方九寸五分、我子の前に直し置く。「母者人こりや何ぢや、いやさコレ此白装束は何の爲」「ヲ、それこそは冥土の晴著。只今其方が首打つて、身がはりに立つるのぢやはい」「エ、イ、滅相な事ばかり、此首を身がはりとは、そりやマア誰が」「今日其方が主人と頼みし、長尾三郎景勝公の御身がはり。聞及ぶ武田信玄、越後の謙信、室町の御所において、互に我子の首討つて、心底を顯はさんと契約ある由、最前そちを召抱へんとて來られし景勝の面體、そちが顔にさも似たり。扱はと母が推量違はず、箱の中に殘

されし此一通に、委細の様子詳に記されたり。主従となるからは、命は君に捧けしもの、武士の因果と諦めて、潔う死んでくれ」「コレくくく、能う思うても見やしやれ、いかに主ぢやとて、まだ知行もくれぬ中に、殺さうといふ様な、胴欲な主があるものが。イヤく、もう此主従とんと變改」「イ、やさうはなるまい。いつぞや諏訪の森において、殺さるゝそちが命、助置かれし景勝の恩忘れはせまい。其時の情は今身がはりに立てん爲、智謀の良にかよりしとは知らざるか。恩を知らねば人ではないぞよ。たとへ逃けても此家のぐるりは、景勝の家來取巻いて、一寸も遁れはない。切腹するか、但し母が手かけうか。サアくなんとなんと」と詰めかけられ、籠中の鳥の目はうろく、隙を見て逃出す、膝口はつしと手裏劍に、しりへにどつさり詮方なく、「是非に及ばぬもう是まで」と、腹切刀取るより早く、右の眼に突込んだり。遺の老母も不審顔。流るゝ血を押拭ひく、「母者人、景勝に似たによつて、身がはりに立てたがる、小面倒な此面に、かう疵付けて相好變へれば、もう身がはりの役には立つまい。今日只今父が苗字を受繼ぎ、山本勘助晴義、軍法奥義を胸に貯へ、三略の巻より大切な此命。ヤアく謙信の家來直江山城介種綱、夫へ出でよ、言ひ聞かす仔細あり」と、呼はる聲に一間の内、「見參ぞう」と、慈悲藏が優美の骨柄、長社袴さわやかに、「某長尾の家臣たる事、深く包んで古郷へ

歸りし其仔細、母人には密に語り、豫て申受けたる兄者人の命、現在の子を捨てたも、否應いはさぬ命の無心。去ながら、眼をくつて身を全うする大丈夫の魂、あつたら勇士を殺すは残念、長く謙信に仕へ、忠勤を盡さるべし」と、言はせもあへず冷笑ひ、「おろかく」。謙信づれが家に來には汝等が分相應、身が主には釣合はぬ。誠山本勘助が崇むる主人は、忝くも足利十三代公達松壽君。是へ誘ひ申されよ」と、詞の下に高坂が妻の唐織、次郎吉を傳き申せば、山城親子、ハアはつとばかり飛びしさり、恐入つたるばかりなり。眞中にどつかと直り、「ヤイ山城、只今打つたる此手裏劍は、先年室町の館にて、此公達の御母、賤の方を奪ひ取り、立退く折から、景勝目當に打ちかけたる我小柄、只今我手へ慥に落手。山本の苗字を引興さんと、軍學に心をこらす處に、武田信立大僧正、妾をやつし只一人、密に庵へ來らせ給ひ、足利の行末覺束なし、汝我力となつて事を謀れと、名將の一言心魂に徹し、ハ、ア畏り奉ると、卽座の諒承弓矢の誓」「チ、其時に此母も、只人ならずと思つたが、さては武田信立公と、主従の契約仕やつたの」「チ、サ、大魚は小池に住まず、鶴は枯木に巢をくはず、智勇兼備の大將に、頼まれ申せし身の面目、直様都に馳上り、窺ふ時しも館の騒動、義晴公はあへなき御最期。ハッアせん方なし、懷胎の賤の方、人手には渡さじと、忍び入つて御家の白旗諸共守り奉り、立退く館は八方

に、挑燈松明ちる花の、都を跡にをちこちの、雪の信濃路爰かしこ、月の更科の片山里に、人知らず隠まふとは、さしもの母も御存じあるまい」「知らなんだく。コレく、さうして御母賤の方の在所は何所。サ、い、どうぢやく」「ハア申すも便なき事ながら、憂き事つもる産後の惱、はかなく此世を去り給ふ。跡に残りしあの公達、勿體なくも我子と偽り、次郎吉よくと、呼ぶ度々の空恐ろしさ口惜しさ。弟嬢が乳を幸ひ、我子を捨てさせ、他家のあの子を養育さする我心底。我儘無法は一物ありと悟りし老母、雪の中の筭を、掘つて見よとは天晴明察、實に勘助が母人ぞや。穢れを厭ひ今日まで、埋置いたる雪中の筭、是にあり」と、箱押取つて差上ぐる、源家正統武將の白旗。「神明を頭に戴く義兵の旗上げ、謙信親子只今より、此勘助が幕下に付けと、立歸つていひ聞かせよ」と、一つの眼に天が下、見下す富士の山本勘助、三國無雙の弓取なり。山城大きに感じ入り、「信玄景勝不和なるも、互に心を疑ひあふ、忠臣割符を合すがごとし。君御在家知るゝ上は、景勝公の言譯立つて、身がはりにもう及ばぬ。追付兩家和睦の基」「成程々々、最前裏で直々に様子を聞いた、信玄公と勘助様、言合せのある事は、一家中へもお隠しあれば、夫高坂も露知らず、抱へに來た慈悲藏殿は、思ひも寄らぬ長尾の御家來。君の御事初めて聞いた使の面目、此上なし」と悦びの中に、歎きは一人の孫、「斯う心が

とけるなら、仕様も様もあらうもの。此婆々が偏屈から、信玄方の恩受けては立たぬといった一言で、直江が手にかけて殺しやつたは、即ち母が殺した同然。コレくく、娘女赦せ」「ア、勿體ない。乳房に離れて死ぬ命、思はず知らずお主様の、お役に立つたも因縁」と、泣かぬ顔するいぢらしさ。母は一間の一卷携へ、「不孝と見えし勘助は、却つて父の名を上ける、二十四孝に優りし孝。器量も揃ふ二人の子供、軍法傳授の此一卷、頂戴しや」と差置けば、勘助取つて押戴き、「父の苗字を給はれば、勘助が身の規模は立つ。母方の氏をつぐ、弟直江が母への孝、其徳によつて此一卷は、其方に下さるゝ、御恩を忘れず猶此上、孝行怠る事なかれ。景勝の忠臣は、我胸中に徹したれども、心得がたきは親謙信、君に弓引く逆心ならば、汝も従ふ心や如何に」「言ふにや及ぶ。我子を切つて二君に仕へぬ此山城、兄とはいはさぬ敵味方、此三畧の恩を仇、一合戦仕らん」「ヲ、さもあらん、出かすく。我又主君に仕ふる甲斐の天目山に立籠り、出合ふ所は川中島、運に乗じて越後の出城、諏訪の城まで押寄せく、さも目ざましき勝負をせんず」「ホ、潔し去ながら、假にも一旦景勝に、請けたる恩は何とく」「ヲ、日月にたとへたる右の眼は越後へ進上、一心なき勇士のかため、母にあたへし片しの下駄、景勝の志、捨つるは武士の道ならず」と、左の足にしつかと履き、おり立つ庭の高低も、道はゆがま

ぬ弓取の、直なる竹の根もとより、はつしと切つたる旗竿は、盛運目出たき大將の、さそふは賢き御笑顔、眠れる花の死顔に、抱いてゆぶつてすかしても、返らぬ昔唐土の、二十四孝を目のあたり、孟宗竹の筭は、雪ときえ行く胸の中、氷の上の魚を取る、それは王祥、是他生の縁と縁、黄金の釜より逢ひがたき、其の子寶を切離す、弟の慈悲の胸欲と、兄が不孝の孝行は、我が日の本に一人の勇士、今に名高き山本氏、武田の家の礎と、事跡を世々に残しける。

第四 通行似合の女夫丸

偽りの文字を分くれば、人の爲、身の爲ならず戀ならず、心なければど濡衣が、亡き夫の名も勝頼に、ともなふ人も勝頼と、いうてよしある簀作が、ちらしくばりて藥賣、今日立ちいづる此國も、かいしよありけな女子の所體、きどく帽子に筒脚絆、跡につどいて藥荷を、かづく肱笠袖笠の、匂はぬ花の降りつもる、信濃路さして行く道の、泊々や宿々へ、商ふ物は草の種、命の種のいく藥、詞に艶を濡衣が、「そも此藥は、陸奥南部にかくれなき、新羅の家の名方、萬の病に用ひてよし」それ藥一粒は、たとへ千金萬金にもかへ難き、其我夫は世をさりて、い

の世にかは木曾の流の山川に、女浪男浪がさて義まし。夫婦ならねば、つい言ふ事もかた田舎、情がましい一言は、いはじ岩間の細道を、歩行馴れたる脛の雪、明夫は冥土に我身はこよに、櫻花かやちりぐに、花かや櫻、櫻花かやちりぐに、ちりにまじはる神心、伏拜み行くうてなが原、道行く人も指ざして、あやかり者とあだ口に、浮名立つるもア、はづかしや。今の我身はなかくに、戀も情もあればてし、青柳過ぎて宮田の町、とかく浮世は伊勢の濱荻、難波の蘆とかはれども、かはらぬ物は夫の名と、おまへもいはど勝頼様、いつの世にかはあひそめ川の、身の浮しづみ七度は、氷を渡る信濃路へ、急ぎ行くのが第一丸、此御薬も簀作も、もとが新羅の流にて、彼よし是よし世の中も、よしと浮世を渡る川、心にごさずすみ染の、此身の末は天の川、空にも戀があればこそ、雲に浮名は七夕の、糸繰返し返しつゝ、戀の染衣濡衣が、昔を忍ぶ流行唄、明くるかくと川下を見れば、川原柳の、影ばかりさりとは影ばかり、川原柳の影ばかり。君を待ち、忍びぐにつま戸へ來れば、月の影さへ、氣にかゝるさりとは氣にかゝる、月のかけさへ氣にかゝる。エ、逢ひたやな。問ふも語るもいく難所、野越え里越え山越えて、此所の一村彼所の宿の、軒つゞき薬々と賣り聲も、やさし、しほらし、立ちならぶ家居に今宵一やどりと、暫く勞を 三重はらしける。「なうおそろしやく、怖い咄でちりけ元から

身の毛がよだつ。燈心一筋へすべいと、相州北條氏時の和田の別所、村上左衛門預りて、今日留守番の中間小者、百物語も親方の、油甜りと知られける。「サア、今度は衛内が咄番だ。又おらが燈心もよつぱり減り、うそぐらうなつて、隅々が見らるよ。信玄の領分天目山と國竝の此信濃なれば、化物が出べい。わいらもソレ、鰐元くつろけてをれさ」「チ、此寒六も、冬平も、油断はせない。若し女の化物が出たら、大刀物で打切るより、打切買つたと思つて、かつゑてゐるだんびら物にたんのうさそ。サア、衛内、咄せろさ」「チ、サ、昔、甲斐國に怪氣深い女があつて、男の心のかはつたを恨み、夜なく男の門に行き、聲うちふるはして、なう恨めしや妬ましや、言ひかはしたを忘れはせじ、今こそ思ひしらすべいと、戸を蹴破り、男の喉へくらひ付き、生ながら鬼になつたと、京大坂のしばやで、甲斐國の女の鬼と、狂言にしたけな。夫から其家が毎夜さ家鳴」「フウ是はよつほど怖い咄だ。聲ふるはせずと咄せろさ。コリヤ寒六、其様におらがねきへ寄るなやい」「イヤサわ、それが身どもをおすぢやないか。シテ其後は、どうかく」「それから二階がめきく、裏背戸がぐわたくく、アレどろくと家鳴かするは、百物語の不思議か」と、赤鯰の反打ちまはし、もつそをきらずで喰ふごとく、壁を睨んで尻込する、其中にどんくと、間近く聞ゆる太鼓の音。「待て、あれはお旦那村上様、

和田山で獸狩の列卒太鼓、アレ／＼近う聞えるから、お歸りに間も有まい。こゝろ片付け掃除して、化物より恐しい、旦那のお目玉貰ふな」と、皆部屋々々に入りける。見渡せば野も山も、皆白妙の和田の山、雪の下伏す兎狸、猪狐を狩取らんと、村上左衛門義清、狩装束花々しく、山案内の狩人召連れ、獲物を列卒に指荷はせ、和田の別所に立歸り、門開かせて村上左衛門、悠々と打通り、「ア、冷える／＼。世上の譬に違はず、犬骨折つてたかの知れた獲物、北條殿の此下屋敷を預る某、今日の猪狩も私の遊興でない。諏訪明神の神使は年経る白狐、信玄是を信仰して、武運を祈ると傳へ聞く。何とぞ此狐を狩りとらんと思へども、神通得たる白狐にて、狩人の手に及ぶまじ。さるによつて、一國の野狐を残らず狩取らば、神通得てもさすかは畜生、萬一白狐を射留めたらば、莫大の褒美、其旨きつと心得よ」と、さも横柄に言渡す。近習の侍飯山郡太、おくればせに立歸り、「某列卒の殿を仕らんと、引下り候所に、高島の坂中にて、年ふる雌雄の狐を見出し、弓に矢をはけ追ひかけしに、小笹が隈に進入つて、かいくれに行方知れず、無念千萬仕損ぜしと、薄茅原搔き分けて捜せしに、狐に勝りし女の曲者、生捕りて參上致す」ナニ女を生捕つたとは、必定敵方の紛れ者、幸ひ新身の刀試、胴切にしてくれん、是へ引け」と詞の下、引立て出づる小牡鹿の、是も夫戀ふ女と見え、

都育のほつとり風、女好の左衛門、大口くわつとよく見れば、戀こがれたる腰元八つ橋、其
 儘抱付きたい所、家來の手前と人體作り、「ホ、ウ郡太いしくもしたりな。コリヤ女、近う寄
 つて身が顔を見い。ナコレ村上ぢや〜。おれを慕うて遙々の所能うおぢやつたなうと、い
 ふ所なれど、こゝは主人の下屋敷、アレ多くの家來どもが、ナ合點か。コリヤ者ども、此女今夜
 身が寐間に引きする、新身のだんびらものをもつて、ためして臍の下を見ん。寢所に土壇の用意、
 急げやつ」と、片頬に澁面、片頬に細目、「コリヤうぬらは何してをる、早く失せう。汝もう
 せい」と呵付け、邪魔を拂うて、「コレ戀人、そもじの事を明くれに、うつらくと戀こがれ、待
 ちに待つた念が届いて、今日こゝへおぢやつたは、これ偏に諏訪明神の引合、今日から身が奥、
 但しは嫌か。サ、〜、どうぢや〜」と、しなだれかより抱付けば、振り放し、「私はお主の
 お行方を尋ねさまよひ、是より東の方を心ざして行かねばならず、お志はありがたけれど、今
 は歸して給はれ」と涙ぐめば、「そりやならぬ。言ふ事聴かねば百増倍で仇する左衛門、それでも
 いやか、何と〜」といへど、答もなき入る八つ橋、「エ、しぶとい女め。コリヤ〜家來ど
 も、此女眞裸にして氷責め、八寒地獄の苦みさせい。責めよく〜」と高聲に、八つ橋庭に消
 入る心地、折もこそあれ取次の侍罷出で、「甲斐國武田信玄の使者高坂彈正、越後國長尾謙信

の使者越名彈正、通し申さんや」と伺へば、村上驚き、「フウ長尾は格別、武田とは鋒先を爭ふ中、其兩家の使者、一所に來たとはい得ず。何にもせよ、對面せずば臆せるに似たり、ソレ逃走せぬ様に、其女には繩ぶつて、庭の樹木にくゝし上けい。敵國の使者なれば、手だれの武士共次の間に、ぬかるなやつ」と言渡し、其身も衣服改めて、悠々として座するたる。程なく入來る高坂彈正、越名彈正、刃を爭ふ使者と使者、物をも言はず辭義もせず、見ても見ぬふり上下的、襷と襷ともすれ合ふ中、兩人刀拔置きて、遙下つて高坂彈正、「口上の趣」といはんとするを、「まづ待て高坂、此越名に辭義もせず、使者の口上マアなるまい」「トハなげに」「門前へ乗込むも一時、玄關へ上るも一時、身が口上申上ぐるまで、すつ込んで居よ逃彈正」「ヲ此高坂逃けたか逃けぬか、只今勝負」「ヲ、合點」と刀おつ取り、袴の稜取り、「サア、勝負」と立向へば、村上大口開いてからくと打笑ひ、「主の使者に立ちながら、己等が威勢を爭ひ、身を果すうつけ武士、身に對しては、不禮と言はうか慮外者。察する處、長尾は先達て北條に心を寄する氣、武田も共に氏時の味方となり、此村上とも和睦して、謙信は信立を亡し、信立は又、謙信を亡さんとの頼の使者、違ひはせじ」と村上に、星をさよれて詞を揃へ、「御賢察の通、御味方願ひ奉る頼の使者、お受なされくださらば、我々までも大慶」と、恐入つて述

べければ、「ホ、ウ我眼力違はざりしな。兩家の頼聞入れぬも武士の本意ならず、兩家の返答依怙なき様に武勇鬪、弓矢打物の勝負にて、勝つたる方へ北條村上共に味方。幸ひ是に山狩の弓矢二手、氷をつみ上げ、塚として、一寸二寸的は勝負遅し、五尺的を射させん。ヤアヤア郡太、其しぶとい女めこそ屈竟的、胴腹を射通させ、つれない心に思ひ知らせよ。女め引け」といふ間もなく、縄目血走る細腕、涙ながらに八つ橋も、泣く／＼引かれ立出づる。「あれ見よ兩人、此女は足利家の賤の方の姫八つ橋、我都にて見初め、折がな時がなと思ひし處に、今日思はずも此村上が手に入れどもつれない女、我が詞を背く故、汝等が勝負にて彼めを成敗、我が見る前で胴腹を射通せ」と、刀を杖につゝ立上り、眼をくばれば、高坂、越名、如何はせんと、躊躇ふにぞ、「猶豫すれば味方はせぬ、如何に／＼」と、聲あらゝぐれば、兩彈正、辭するに及ばず、弓矢手挟み、「不便には思へども、國の爲にはかへがたし。心にとくと觀念せよ。サア／＼高坂、勝負ぬかるな」「チ、心得たり」と諸共に、弓と矢つがひ、きり／＼と引きしほり、弓手馬手へ身をひらき、切つて放す目當は村上、射かくる矢先兩手にしつかと、「ハ、ハ、ハ、ハ、察する處、謙信立心合せ、和睦を言立て、此村上を討取らんとはおろかく。所存も知れざる汝等に、弓矢を渡す左衛門が大肝に、汝等が矢先が立つべきか。ヤア家來ども、

女を引立て、きやつばらを搦捕れ」と、聲の中より列卒の者、ばらくと追取りまく。「エ、欺し寄つて討取らんと計りしに、仕損じて高坂」「テ、越名」無念々々に腮叩かすなど、取付くやつばら、右と左に踏みすゑ蹴すゑ、一度にかゝれば信立流、謙信流の太刀打早業、手を碎いたる働に、家來も列卒もたまりかね、むらくばつと逃入れば、めざすは村上遁さじと、雙方より切りかくるを、引つばづしく、重ねて切込む刃と刃、テ、合點と身をかはし、傍なる火鉢でしつかと押へ、引かんくともかく二人が首筋掴み、ぐつと引寄せ締め付けられ、無念々々と挽けども、膝にかためてびつくと動さず、「汝等此村上を欺討に討たんとせし其返報に、踏殺さうか、但しは擱殺さうか、如何したら腹が癒よ、テ、夫よ、當の矢を射返さん、肝のたばねに受取れ」と、矢矢二本逆手に取り、喉吮ぐつと一ゑぐり、ゑぐりゑぐられ高坂越名、七頭八倒五體をもがき、あへなき最期ぞせひもなき。「女めは何所にをる、早く」と、呼ばれておづく八つ橋が、きも魂も身に添はず、此體見るよりはつとばかり、袂を顔に押當て、そとろに顫ふばかりなり。「コリヤ八つ橋、おれに敵たふ奴原が、此死にざまをよつく見たか」と矢矢引抜き、どうど蹴飛ばし、「女もおれが詞を背くと、まつ此通り。いやでも應でも抱いて寐る、寢所へ來い」と引立て行く。奥は俄に家鳴震動、庭の植込さわくと、風に

煽^{あふ}つて蠟燭^{ろうそく}の、火影^{ほかげ}に見れば燭臺^{しよくだい}に、目鼻^{めはな}ありく、明朝^{あさ}顔^{がほ}の、あしたに咲^さいて夕^{ゆふ}には、露^{つゆ}の命^{いのち}
 も戀^{こひ}故^{ゆゑ}ならば、儘^{まま}よてんほの皮巾^{かはぎん}著^{やく}、珊瑚^{さんご}の玉^{たま}の目^めを光^{ひか}らし、腰^{こし}にもつれて寄添^{よりそ}へば、村上^{むらかさ}
 ぎよつとし、「コリヤ何^{なん}ぢや。フウ聞^{きこ}えた、今日^{けふ}山狩^{ふやまがり}の狐^{きつね}狸^{たぬき}、我^{あた}に仇^{あだ}する憎^{にく}くい四^よつ足^{あし}、目^めに
 物^{もの}見^みせん」と燭臺^{しよくだい}蹴^け飛^とし、此^{こなた}方^たへ來^{くる}る縁側^{えんがは}に、又^{また}によつほつりと石燈籠^{いしどうろう}、火袋^{ひぶくろ}に顔^{かほ}まさくくと、
 有^{あり}明^あの月^{つき}の眉^{まゆ}、目元^{めもと}に色^{いろ}を夜目^{よめ}遠目^{とほめ}、笠^{かさ}に苦^くむす手水鉢^{てうづはち}、やらじとどむる柄杓^{へしやく}の手^て、跡^{あと}へ戻^{もど}
 れば青天井^{あそてんじやう}が、くるりくるく、蛇^{ぢや}の目^めむき出^だす轆轤口^{ろくろぐち}、開^{ひら}いて窄^{すば}めて、相合傘^{あひあひがさ}の袖^{そで}と袖^{そで}、雨^{あめ}
 や雪霜^{ゆきしも}、ふらばふれく、濡^ぬしはせじと一本^{ほん}の、足手纏^{あして}ひとなり瓢^{ひやく}、瓢箪^{へうたん}から駒下駄^{こまげ}も、庭^{には}の
 飛石^{とびいし}ぐわたくく、待合^{まちあひ}の半鐘^{はんしやう}のうなり、くわんく、鑊子^{くわんす}、刀掛字^{かたなかけじ}の角軸^{つのぞく}も、三幅對^{さんぷくたい}の竹^{たけ}に
 虎嘯^{こらうそ}けば風^{ふう}おこり、龍吟^{りやうぎん}すれば雲起^{うんこ}り、炭^{すみ}のおこつた大火鉢^{おほひはち}、目鼻^{めはな}しかめて這寄^{はひよ}れば、戸障子^{とじやうじ}
 襖^{ふすま}ぐわたくく、さすがの村上氣^{むらかみ}を奪^{うば}はれ、女^をを小脇^{こわき}に引^ひんだかへ、行^ゆけども行^ゆかれず、戻^{もど}れ
 ど戻^{もど}さぬ妖怪^{えうくわい}に、刀^やを抜^ぬいて切廻^{きりまは}れど、たゞ雲霧^{くもぎり}を三重^{さん}切^きる如^{ごと}く、腕^{うで}もなまり五體^{たい}もしびれ、眼^{まなこ}
 暗^{くら}んでよろくくと、どうと伏^ふしたる村上^{むらかみ}が、形^{かたち}ばかりはありくくと、立關^{ひんくわん}廣間^{ひろま}大座敷^{だいざしき}、書院^{しよゐん}床^{どこ}
 の間御成^{まおなり}の間^ま、ありつる女^をも消^き失^えせて、館^{やうた}と見^みえしは信濃路^{しなのぢ}の、雪降^{ゆきふ}りつもる和田^{わだ}の山^{やま}、吹雪^{ふゆき}ばか
 りや 三重^{さん}残^{のこ}るらん。明返^{めがや}せく、迷子^{まへこ}の殿様^{どのさま}かやせ、かへせくと高挑燈^{たかでうちん}に太鼓鐘^{たいこかね}、ますの龜忽^{そこつ}

な大名の、殿様返せと大勢が、尋ねさまよふ向より、「えいさつさ、サツ／＼サ」夜道を急ぐ早飛脚。「コリヤ／＼飛脚、物問ふべい。只今われが来る道で、殿様らしい迷子には逢はなんだか」「イエイエ殿様らしいはさて置き、夜の殿にも逢やしませぬ」「フウ夫れならば金作りの刀脇指で、心中などしてではないか。水にはまつて若し死にはなされぬか」「イヤそんな事は見當らぬ。迷子の子が大名なら、火にくばらしやろも知れますまい。ヤア早飛脚が何かといふ間に遅飛脚、随分尋ねさしやませ」と、道を早めて走り行く。家中の者ども力を落し、「ア、おいとしやおいとしや、大方狐の業である。今頃はてつきりと、お召がへの雲雀毛が、穢い物を小豆餅ぢやと思召して、ひつたものあがるであろと、案じて居ても事が済まぬ。胡散なは此萱原、搜して見よう」と足輕ども、そこよこよと、雪かき分くる萱の蔭、人こそあれと挑燈手ん手に、見れば見る程、粉もなき迷子の殿様。「申し／＼、迷子の子の殿様いなう」と、聲に氣の付く村上左衛門、むつくと起きたる其形は、筵袴に竹大小、反打廻して大音上げ、「それへ来るは武田信玄、かくいふは信濃の住人村上左衛門義清が、止めた、やらぬ」と呼はつたり。「ア、申し／＼、私はお草履取の化介でござります」「フウ化か、信玄ではないぢやまで。あれ／＼、卑怯未練の越後の謙信、遁さじやらじ」と、追ふを止むる家來ども、「コハ正體なき旦那の有様、人の見る目も恥ぢ給へ」

と、抱きとむれば漸と、狂ひ伏してゐたりしが、村上漸心づき、「やあら不思議や、今まで和田の館の内、越名高坂を刺殺し、我ながらついに覺えぬ勇力と思ひしが、こゝへはマアどうして來た」「サア昨日の山狩から、迷子におなりなされ、一家中が一遍三界、皆籠までお迎ひに參つてをります」「ム、そんならおれが強かつたのは狐の業か」「成程かのでござります」「かのとは誰ぢや、八つ橋か。やれく戀しゆかしと焦れた戀人、手に手を取つて、歸ろやれ」足元を爪立て、ちよこくくくと爪立てて、行かんとするを家來ども、よつてかゝつて乗物に、助け乗すれば徒士若黨、「乗物參れ」に、「はいくく」尋逢うたる太鼓鐘、はやし立てく、「迷子の殿様取返した、かへしたく」お先手をふる迷子の子、逢うてめでたき信濃路の、薄萱原踏み分けて、いなうやれ、我故郷へ三重立歸る。信濃なる諏訪の湖要害に、立籠りたる館城、長尾入道謙信は、代々越後の城主として、己が武勇の鋒先に、爰も切取る諏訪の城、新に建つる奥御殿は、義晴公の御幼君、後室手弱女御前、共にお成を設けの結構、大方ならず見えにけり。今日ぞ其日と腰元婢、忙し中に立集り、「何と皆の衆、去年からの御普請で、結構に建つた奥御殿は、武將様とやらの後室様のお成ぢやけな。わしらはそんな事とは知らず、此館のお姫様、八重垣様の御祝言、其拵へかと思つてゐた」「チ、彼の人の言やる事はい。八重垣様に御許嫁の

あつた勝頼様は、去年の秋御切腹。それで其勝頼様の姿を繪に寫し、お姫様が明けても暮れても、泣いてばかりござるが、そなたの目にはかゝらぬか。今日の拵へは、今日日本の大將軍のお子様なり、其御室様、尋常のお客とは違ふ。夫で此間より國々の名物をお求めなさるれど、今此諏訪の湖に、氷が張り詰め、舟の往來も叶はぬ故、何かが嚴い手づかへと、役人衆の心遣ひ、夫程晴れなお客様故、念に念を入れて不調法の無い様にとの言付。新參とは云ひながら、物馴れた濡衣殿、何かの事を頼むぞや」「ホ、是は又、人をつつながらす様に、物馴れたやら馴れんやら、今參りの私、御前方に引廻して貰はにやならぬ」と、傍輩中のおれそれも、中よく見ゆる中庭より、いきせき出づる簀作が、今は姿も菊作り、花恥かしき角額、縁先に小腰を屈め、「奥庭の花壇の菊、かどむを伸し、延びるを縮め、枯葉一枚無い様に、残らず手入仕り、漸只今相仕舞ふ」と、言ふ顔うつとり腰元中、さても見事好い男、こんな男に手入しらるゝ菊の花はあやかり者、わしらもどうぞ彼の人の手入で小菊が咲かしたい」と、何かな惡口言ひずてに、奥へ行く跡幸ひと、傍見廻し濡衣が、庭におり立ち手をつかへ、「あなたにお別れ申してより、此館へ入込むわたし、程ふる日數の明暮も、どうお暮し遊ばすぞと、案じるうちに思ひも寄らず、菊作となつて此館へ、お出でなされし勝頼様、御思案でもあつての事か」「ホ、不審尤。此家

の主長尾謙信、一子景勝を討つても出さず、剩へ義晴公のわすれがたみ松壽君、御母公諸共、
 今日此館へ招く段、心得がたく思ひし故、菊作となつて入込む某。汝が役目は法性の兜、未だ
 奪取る便もなきや、濡衣如何に」とありければ、「ホ、其兜の事故に、奉公に出た私、徹塵も油
 斷は致さねど、何をいふても用心厳しく、夫故心に任さねど、お悦び遊ばしませ、今日の饗
 とあつて、其兜を上段に飭らして候へば、今日を過ぎさずお手に入れん」「すりや其兜が奥の間
 に」「ア、お聲が高い」と差寄て、呬き首肯く二人が相談。それとしら洲へ立出づる、姿一癖あ
 る親仁、「娘々、コリヤ娘」と、呼ばれて胸り飛退く濡衣、「チ、父様とした事が、あの人に
 花壇の事を言付けて居る所を、斷なしに娘々と呼ぶ様な、あた不躰な不遠慮な」「何ぢや、斷
 なしに娘と呼んだが不躰ぢや、こりやおれが悪かつたはい。今度から用があつて呼ぶなら、サ
 ア娘今呼ぶぞと先へ斷ろ、ハ、ハ、ハ、ハ。こりや前髪、わりや花作る事が上手ぢやというて、昨日
 から雇はれて來てゐるが、此花畑は此關兵衛が預り、今日のお成のお饗になる花故、取分け
 て大事と思ひ、助に雇うた花作り、もうお成に間はないが、のらばかりかはいて居つて、それ
 で仕事が出来るかよ」と、呵られて手をもぢく、「イヤモ外の花作ると違うて、不斷手入のし
 てある花壇故、何にも仕事はござりませす、漸と枯葉を取つたり、花形のふりを直すがせいさ

い。それ故仕事も思はぬ掛いき、落葉一枚ない様に、掃除まで仕舞ひましてござります」ム
ムそれなれば精が出た、花壇が濟んだら外に用なし、次へ往て休息せい」と、許す詞に義作が、
勝手へこそは立つて行く。「ハテさて見かけに似合はぬ精出す奴、兎角人はかけ日向が大事の
もの。コリヤ娘、われも随分精出して、御奉公に私爲な」と、いふも親身の親子の中。「チ、父
様の忝ないお詞、稚い時より武田の家に宮仕、不慮の事故、親里へ戻つて見れば、父様も今で
は長尾の此家へ、御奉公を幸ひに、親子一所に宮仕、新参者でも侮られず、傍輩衆にも憎まれ
ぬは、お主の御恩父様のかけ、仇疎には存じませぬ」「チ、さう思へば冥加がよい。此親も
御領分に狩人を商賣に、かつくに暮した身分、謙信公の見出しに預り、お館に置かるゝは、
此屋敷に在る諏訪法性の兜とやらは、諏訪明神より賜はつて、即神のつかはしめ、狐が寄つて
番をする不思議の兜、そこで又野狐どもが其兜を戴けば、官上りするとやらで、折々館を
徘徊する、見付次第打殺せと、アレ座敷先に小家をしつらひ、狐の番が役なれども、勇氣盛ん
な謙信公、何の狐が来よう筈もなし、安閑としてゐる隙に、仕覺えた花畑、時ならぬ菊を作る
がお氣に入つて、狐の事は餘所になり、今では菊の花守親仁、樂々暮すも主人のかけ」と、互
の身の上しみくと、親子咄の折からに、早御成と騒ぎ立ち、奥へ行く人戻る人、心せき兵衛

濡衣も、奥と口とへ別れ行く。館の主長尾謙信、衣冠正しき儲の式禮、角立つ中にさと薫る、音もしとく女中の手舁、邊輝く鈺乗物、見るより謙信謹んで、「優曇花とやいはん、稀代の御入來、冥加に餘る身の面目、直に其儘奥御殿へ」と指圖に隨ひ乗物は、奥へ行く跡謙信も、續いて入らんとする所へ、「暫く待つた、長尾謙信、奥方よりの御上意あり」と呼はる聲、はつと平伏頭を垂れ、待間程なく立派の骨柄、長袴の裾けはらし、上座にとつかと威儀を正し、「先以て今日は、御幼君松壽君、御母公共に入來の面目、恐悅に思はるべし。さるによつて母君より、貴殿への御上意、餘の儀にあらず、先達て申渡せし子息景勝の首、今において討つても出さず、事延引にせらるゝ段、必定野心に極まれば、御前において切腹を遂けらるゝや、但し景勝の首、只今討つて出さるゝや、返答次第はからふ旨あり、謙信いかゞ」と上使の權柄。「こは思ひ寄らざる御上意」と、顔振上げて、「ヤア汝は悴景勝」と驚く謙信、さあらぬ上使。「イヤ景勝にもせよ誰にもせよ、一旦悴を討つべしと契約ありしは諸大名の眞中、今において其沙汰なく、剩へ本國に引籠り、底の知れざる親人の所存、イヤサ謙信の心底と、人の疑ひ立ち申す。何故さつぱりと我等が首、イヤサ悴景勝の首討つて、心底は見せられぬ。サア首討つか、但しは否か、有無の返答承はらん。サアく何と」と、詰寄れば、さすが名を得し謙

信も、悴を悴が討手の上使、返答何と當惑の、口を噤んで見えにけり。「ヤア未練の心底、此上は某ことにて切腹」と、指添に手をかくれば、「ヤレ暫く、必早まり給ふな」と、聲をかけて花守關兵衛、何かしら洲へ白菊の、花携へて立出づれば、「ヤア汝等如きが知る事ならず、退去れやつ」と景勝の、怒にちつとも臆せぬ關兵衛、「イヤ下として上の事、さし出るではござりませねど、最前よりあれにて様子承はれば、如何やら斯う木乃伊取が木乃伊になる様な御上使様、可憎しき侍の首、切つて仕舞へば再び活かぬ。又此花は何ほ切つても活からるゝ、ナ、切つて生かすといふ傳授、お望ならば指上けたい」と、どこやら詞の一理窟、聞いて謙信眉を皺め、「ム、切つて生けると言ふ白菊、面白しく。關兵衛其花所望せん」「成程花は上けませうが、花ばかりでは自由に活かからぬ。それを活かすは花作り、幸ひお次にをりますれば、是へ呼寄せ共々に、活ける傳授を御覽あれ。花作の簀作御用がある、早うく」と、親仁が呼ぶ聲きくつくり、「エ、けたよましい何事」と、此場の様子しら洲の内、いきせき出づる顔形、「ヤア汝は武田勝頼」と、いふをとどめて、「ア、申し、それおつしやると物が無い、何にも知らぬ白菊の花、其活け様を能う覺えた此花作、人の振見て我振直すが第一の傳授事、ナ、是さへ御所望なされば、何もかもさつぱりと申譯の立ちさうなものと、憚ながら親仁めは存じまする」

と簀作が、身の上それとしら砂に、額摺付け蹲まる。「ホ、あつぱれの花作、今より館に召抱へんが、わりや謙信に奉公し、花の活け様傳授せんや」「ハイ、成程、外の事なら存じませねど、花一まきなら、活かさうと殺さうと我等が得物、それを取柄にお抱へなされて下されうなら、望んでなりと御奉公したき御屋敷」「ホ、出かした、うい奴。御上使への御返答、申上ぐるはあの簀作。まづ夫までは暫しの御猶豫、偏に頼み存する」と、餘儀なき頼に打頼き、「火急の御上意容赦はならねど、鹽尻峠に控へ居る諸大名へ申渡す仔細あれば、我は彼處へ立越えん、有無の返事は鹽尻まで。隙だらば直に此城取圍まん」「追付け有無の御返答、認むる中簀作も、次へ參つて衣服大小」「ハア有りがたしく」と、勇む簀作、景勝は、苦り切つたる鹽尻へ、別れてこそは出でて行く。跡見送りて關兵衛は、謙信の前に手をつかへ、「花作の簀作、合點行かぬと存ぜしが、あれが大方」「ホ、紛もなき武田勝頼。それと見出せし花守關兵衛、下郎に似合はぬ中々器量のある親仁、其性根を見込み改めて謙信が、頼み入れたき仔細あり。我に頼まれ得させんや、返答聞かん」とありければ、「是は又改まつたお詞、元獵人の私、お見出しに預かつた君の太恩、たとへ命の御用でも、いやとは申さね我等が魂」「ホ、頼もしよく。其詞を聞く上は、何をか包まん是見よ」と、しづく立つて一間の障子、開けば内に怪しき牢輿。關兵

衛不思議とさし覗き、「牢の内には科人らしき者も見えず、何やら見馴れぬ變つた物、そりやマア何でござります」と、尋ねに謙信威儀繕ひ、「未だ日本へ渡らざれば、汝等が知らぬは理、是こそ鐵砲と名付けし飛道具」「ム、其又鐵砲とやらが、盗みでも致せしか、何の爲に此牢へ」「ホ、科は天下を望む叛逆。さいつ頃武將の御前へ、薩州種が島の浪人、井上新左衛門と名のり、此鐵砲を獻上し、類なき軍器の重寶、遣ひ様の傳授せんと、瞞し寄つて義晴公を一打に、跡をくらまし其場を逐電、草をわかつて尋ね搜せど、今に行方知れざる曲者、詮議の手筋は此鐵砲、其所に残りありしが、即ち科人同然なれば、此の如く禁牢させ、日毎の拷問手を盡せど、義晴公を打ちたる敵、今日まで白狀せざる不敵の鐵砲。只今より此詮議、汝に申付くる間、火水を以て責めさいなみ、敵の所在を白狀させよ」と、鐵砲くらりと投げやれば、手に取上げて呆れ顔、「すりや私にお頼あるは、此鐵砲とやらを責めいでござりますか。是は又思ひも寄らぬ。拷問も問狀も、なみくの人間なら、及ばずながら責めも致さう。煙管屋の看板か、唐の火吹竹見る様な物、責めいとは御難題。あなた方の手にさへ合はぬ物、其上何を證據手がかりも」「チ、手がかり證據は其鐵砲の遣ひ様、普く世上に知る者なし、其傳授を覺えし者こそ」「ム、すりや何と御意なされます、此鐵砲の遣ひ様を覺えた者が」「ホ、即ち武將を打つたる

敵「スリヤどうでも詮議を私に」「仕損ずまじき汝が魂」「アノ此親仁が性根魂を」「サア見込んで頼むに違背はあるまじ。油斷致すな關兵衛」と、詞も重き大將の、心残して入り給ふ。「アア申し、我等風情にこんな役目、難題も事による、外へ仰付けられい」と、跡を眺めて、「ム、未だ日本へ渡らぬ鐵砲、遣ひ様を覺えし者が、義晴を打つたる敵、此關兵衛に詮議せよとは、ム、合點の行かぬ謙信」と、諸手を組んで工夫の顔色、「ア、いや、どう思案して見ても、我等には似合はぬ役目、やつぱり似合つた花の番、烏威しの弓矢より、外には何にもしら髪がの親仁おやぢ、ドレこや小家へ往て一休」と、振擔ふりかたけたる鐵砲も、胸むねに一物あり明あけの、月漏る臥所ふしどへ行く水の、流れと人のみの作さくが、妾見すがたみかはす長上下、悠々として一間を立出で、「我民間われみんかんに育ち、人に面を見知られぬを幸ひに、花作となつて入込みしは、幼君の御身の上に、若し過やあらんかと、餘所ながら守護する某、それを悟つて抱へしや。ハテ、合點の行かぬ」とさしうつむき、思案に塞がる一間には、館の娘八重垣姫、許嫁ある勝頼の、切腹ありし其日より、一間所に引籠り、床に繪姿かけまくも、御經讀誦の鈴の音。此方も同じ松蟲の、鳴音に袖も濡衣が、今日命日を弔ひの、位牌に向ひ手を合せ、「廣い世界に誰あつて、お前の忌日命日を、弔ふ人もなさけなや、父御の惡事も露知らず、お果てなされたお心を、思ひ出す程おといしい。嘸や

未來は迷うてござらう。女房の濡衣が、心ばかりの此手向、千部萬部のお經ぞと、思うて成佛して下さんせ。なむあみだ佛くく」「誠に今日は霜月廿日、我身がはりに相果てし勝頼が命日、暮れ行く月日も一年餘り。南無幽靈、出離生死、頓生菩提」「申し勝頼様、親と親との許嫁、ありし様子を聞くよりも、嫁入する日を待ちかねて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御とそひ臥の、身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも樂みは、繪像の傍で十種香の、煙も香花となつたるか、廻向せうとてお姿を、繪には書かしはせぬものを。魂返す反魂香、名畫の力もあるならば、可愛とたつた一言の、お聲が聞きたいく」と、繪像の傍に身を打ちふし、流涕こがれ見え給ふ。「あの泣聲は八重垣姫よな。我名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、弔ふ姫と弔ふ濡衣、不便ともいじらしとも、言はん方なき二人が心」と、不覺涙にくれけるが、「ア、我ながら不覺の涙」と、衿かき合せ立上る、後にしよんほり濡衣が、「申し義作様、合點が行かぬは貴方のお姿、どうした事で此様に」「テ、不審尤。はからずも謙信に抱へられたる衣服大小」「テモさても、衣紋付なら、上下の召し様まで、似たとは愚やつぱり其儘。形見こそ今は仇なれこれなくば、忘るゝ事もありなんと、詠みしは別を悲しむ歌、かたみさへぢやに我夫に、微塵かはらぬこのお姿、見るに付けても忘れられぬ、わたしや輪廻に迷うた

さうな。御赦されて」と伏沈む、泣聲洩れて一間には、不審たち聞く八重垣姫、そつと襖の隙間もる、姿見まがふ方もなく、「ヤア我夫か、勝頼様」と、飛立つ心を押ししづめ、「正しうお果てなされしもの、似たと思ふは心の迷ひ、繪像の手前も恥づかし」と、立戻つて手を合せ、御経讀誦の鈴の音。勝頼公は濡衣が、心を察して聲曇り、「はかなき女の心から、歎くは理、さりながら、定めなき世と諦めよ」と、諫むる詞此方には、心空なる其人の、若しや存へおはすかと、思へば戀しくなつかしく、又覗いては繪姿に、見くらべる程生寫し、似はせでやつぱりほんくの、「勝頼様ぢやないかいの」と、思はず一間を走出で、縋り付いて泣き給へば、はつと思へどさあらぬ風情、「こは思ひよらざる御仰、我等義作と申す花作、漸只今召抱へられ、衣服大小改めし新参者、勝頼とは覺えなし。御龜相あるな」と突放せば、「ム、何といやる、今父上に抱へられし新参者、花作の義作とや。自らとした事が、餘り能う似た面さしの、若しやそれかと心の煩惱。二人の手前恥づかしながら、コレ濡衣、此義作とやらいふ人を、そなたは疾うから近付か」「エイ」「いやいの、知る人であらうがの」「アノお姫様とした事が、たつた今見えたお人、何のマア私が」「イヤ隠しやんな、今の素振、忍ぶ戀路といふ様な、可愛らしい中かいの」と、思ひもよらぬ詞に悔り、「オ、お姫様のおつしやる事はいの。人にこそよれ、何のあなたに勿體な

い「ム、勿體ないといやるからは、どうでも其方の知るべの人か」「イ、エさうではなければ
も、大事のお主の目を掠め、忍び男を拵へるは、勿體ないと申す事でござります」「ム、すりや
知るべの人でなく、殿御でもない人なら、どうぞ今から自を、かはゆがつてたもる様に、押付な
がら媒を、頼むは濡衣様々」と、夕日眩く顔に袖、あてやかなりし其風情。「チ、お姫様とした
事が、まだお子達と思ひの外、大それたあの簀作殿を」「サア、見初めたが戀路の始め、後とも言
はず今こゝで」「媒せいとおつしやるのか。がをれ、ほんにお大名のお娘御とて、油斷はならぬ
戀の道。品に寄つたらお取持致しませうが」「コレく濡衣、必龜相いふまいぞ」「サア何もか
も私が、吞込んで、吞込んでお取持致すまいものでもないが、眞實底から簀作殿に、御執心でござ
りますか」と、問はれて猶も赤らむ顔。「勤めする身はいざ知らず、姫御前のあられもない、殿御
に惚れたといふ事が、嘘偽りにいはれうか」「其お詞に違なくば、何ぞ慥な誓紙の證據、それ
見た上でお媒」「チ、夫こそ心安い事、其誓紙さへ書いたらば」「イエく、それも此方に望が
ある、わたしが望む誓紙といふは、諏訪法性の御兜、それが盗んで貰ひたい」「ヤア何といや
る、諏訪法性の御兜を、盗出せといやるのは、さてはあなたが勝頼様」と、言ふ口押へて、「ハ
テ滅相な勝頼呼はり、微塵覚えのない簀作、龜忽ばし宜ふな」と、いふ顔つれぐ打守り、

「許嫁ばかりにて、枕かはさぬ妹背中、お包みあるは無理ならねど、同じ羽色の鳥翅、人目にそれとわからねど、親と呼び又つま鳥と、呼ぶは生あるならひぞや。いかに顔が似ればとて、戀しと思ふ勝頼様、そも見紛うてあらうか。世にも人にも忍ぶなる、御身の上といひながら、連添ふわたしに何遠慮、つい斯うくとお身の上、明して得心さしてたべ。それも叶はぬ事ならば、いつそ殺してく」と、縋り付いたる恨泣き。勝頼態と聲あらゝけ、「ヤア聞分なき戲言、いか程に宣ふとも、覺えなき身は下司下郎。餘處の見る目も憚あり、そこ退き給へ」と突放せば、「スリヤどの様に申しても、勝頼様ではおはさぬか。ハア、」はつとばかりに簀作が、指添逆手に取り給へば、「こは御短慮」と止むる濡衣、「イヤく放して殺してたも。勝頼様でも無い人に、戲言の恥づかしや。心の穢れ繪像へ言譯、どうも生きては居られぬ」と、又取直すを猶も押止め、「チ、さすがは武家のお姫様、天晴なるお志。其お心を見るからは、勝頼様に逢はせませう。ソレそこにござる簀作様が、御推量に違はず、あれが實の勝頼様。ちやつとお逢ひなされませ」と、突きやられてはさすがにも、初めの恨み百分一、「聞えませぬ」が精一杯、跡は互ひに抱付き、つい濡れそめに濡衣も、心ときつく折からに、父謙信の聲として、「簀作はいづれにをる。鹽尻への返答、時刻移る」と立出づれば、はつと簀作飛びしさり、「御支度よくば

直様參上」「ホ、委細の事は此文箱に。片時も早く罷越せ」はつと領掌文箱携へ、鹽尻さして急ぎ行く。謙信跡を見送つて、「ヤア、〳〵者ども、用意よくば早來れ」と、仰にはつと白須賀六郎原小文治、更科なんどの譜代の郎等、御前に進めば謙信勇んで、「今此諏訪の湖に、氷閉づれば渡海は叶はず、鹽尻までは陸路の切所、油斷して不覺を取るな」「ハ、ア、畏り奉る」と、勇み進んでかけり行く。跡に不審は八重垣姫、「申し父上、こと〳〵しい今の有様、何事やらん」と尋ねれば、「ホ、あれこそは、武田勝頼討手の人數」「何、勝頼様を討手とは」「こはそも如何に、何故にと、驚く二人をはつたとねめ付け、「諏訪法性の兜を、盗出さんうぬらが工、物かけにて聞いたる故、勝頼に使者を言付け、歸りを待つて討取らさんと、牒し合せし討手の手配」「エイ、そんなら今の討手の者は、勝頼様を殺さん爲か。ハア、」はつとばかりにどうと伏し、「今日は如何なる事なれば、過去り給ひし我夫に、再び逢ふは優曇花の、悦んで居たものを、又も別れになる事は、何の因果ぞ情なや。父のお慈悲にお命を、どうぞ助けて給はれ」と、くどき歎くに目もやらず、「ヤア武田方の廻し者、憎き女」と濡衣引立て、「うぬには尋ねる仔細あり、奥へ失せう」と小腕取り、情用捨もあら氣の大將、帳臺深く入り給ふ」唄思ひにや、焦れて燃ゆる、野邊の狐火小夜更けて、狐火や、狐火野邊の、野邊の狐火小夜更けて、幾重洩れくる爪音は、

君を儲の奥御殿。こなたは正體涙ながら、「アレあの奥の間で檢校が、諷ふ唱歌も今身の上、おいとしいは勝頼様、かゝる工のあるぞとも、知らずはからぬお身の上、別れとなるもつれない父上、諫めても歎いても、聞入れもなき胸欲心。娘不便と思すなら、お命助けて添はせてたべ」と、身を打ふして歎きしが、「いや／＼泣ては居られぬ所、追手の者より先へ廻り、勝頼様に此事を、お知らせ申すが近道の、諏訪の湖舟人に、渡り頼まん急がん」と、小褻取る手もかひ／＼しく、かけ出でしが、「イヤ／＼／＼、今湖に氷張詰め、舟の往來も叶はぬ由。歩路を行きては女の足、何と追手に追付かれう、知らすにも知らされず、みす／＼夫を見殺しに、するは如何なる身の因果。ア、翅がほしい、羽がほしい。飛んで行きたい、知らせたい。逢ひたい見たい」と夫戀の、千々に亂るゝ憂思ひ、千年百年泣明し、涙に命絶ゆればとて、夫の爲にはよもなるまじ。此上頼むは神佛と、床に祭りし法性の、兜の前に手をつかへ、「此御兜は諏訪明神より、武田家へ授け給はる御寶なれば、取りも直さず諏訪の御神。勝頼様の今の御難儀、助け給へ救ひ給へ」と、兜を取つて押戴き、押戴きし弟の、若しやは人の咎めんと、窺ひおる飛石傳ひ、庭の溜の泉水に、映る月影怪しき姿、はつと驚き飛退きしが、「今のは慥に狐の姿、此泉水に映りしは、ハテめんような」と、どきつく胸、撫でおろしく、こは／＼なが

らそろ／＼と、差覗く池水に、映るは己が影ばかり。「たつた今此水に、映つた影は狐の姿、今又見れば我倂、幻といふ物か、但し迷ひの空目とやらか。ハテあやしや」と、とつおいつ、兜をそつと手に捧げ、覗けば又も白狐の形、水にあり／＼有明月、不思議に胸も濁江の、池の汀にすつくりと、眺入りて立つたりしが、「誠や當國諏訪明神は、狐を以て使はしめと聞きつるが、明神の神體に等しき兜なれば、八百八狐付添ひて、守護する奇瑞に疑なし。オ、それよ思ひ出したり。湖に氷張詰むれば、渡初する神の狐、其足跡をしるべにて、心安う行來ふ人馬、狐渡らぬ其先に、渡れば水に溺るゝとは、人も知つたる諏訪の湖。たとへ狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に、神の力の加はる兜、勝頼様に返せと有る、諏訪明神の御教、ハア、忝なや有難や」と、兜を取つて頭にかづけば、忽ち姿狐火の、こゝに燃え立ちかしこにも、亂る姿は法性の、兜を守護する不思議の有様。こなたの間には手弱女御前、始終の様子窺ふとも、いさしら菊の花の番、小屋にとつくと關兵衛が、付廻しても神通力、花のまに／＼見えつ隠れつ神去る狐。南無三寶とせき立つ關兵衛、ねらひの的は手弱女御前、どつさり響く鐵砲の、音を合圖に遠近より、俄に響く鐘太鼓、亂調に打立つれば、騒かぬ關兵衛廣庭に二王立。程なく馳せ來る雜兵原、我討取らんとひしめいたり。「ヤアしほらしきうざい餓鬼、此世の暇取らさ

ん」と、大刀するりと拔放し、當る任せに薙立てく、御殿をさして三重行く先の、間ごとくは森々と、灯火消えて音せぬは、敵の油斷折こそよけれ、烏帽子素袍も忍び入る、時の用にぞおほ廣間、咎むる人もなが廊下、長袴の裾指足に、御座の間近く窺ふ關兵衛。あやしとかねて勝頼が、透かせど見えぬ眞の闇、人こそあれと身を避くれば、此方も避くる彼方の一間、立ちふさがつたる三郎景勝。遣り過してかけ入るを、袖引きちぎれば手にさはる、下の腹巻。スハ曲者と組付く景勝小手返し、ひらりと付け入る勝頼を、さしたりと眞の當、たちくくくと後じさり、騒がぬ大膽すまし顔、人を欺く坂東聲、「大將の御座近く、帶劔の武士叶ひ申さず。銘々詰所の當番、大切に致されよ」と、外らさぬ體にしづくくと、猶奥深く行く所を、「ヤアヤア美濃國の住人齋藤入道道三、とどまれやつ」と聲かけられ、肝にこたへて駈戻り、邊をきつと大音聲、「ヤアラいぶかしや、三十年來跡をくらまし、包隠せし我本名、齋藤道三と呼んだるは、そも何奴ぞ對面せん」と、廣縁先に枯木立。景勝勝頼前後をかこひ、逃げば切らんと詰めかくる。後の襖さつとあけ、武田の忠臣山本勘助、「叛逆人の詮議をとけん」と、悠然と立出づる。續いて近習諸大名、御殿廣間も燭臺に、一度に輝く灯の光、遁れん方こそなかりけれ。されどもちつとも臆せぬえせ者、「ヤア長尾謙信の此城へ、日頃不和なる武田の家臣、山本勘助

とやらん、のさばり來るも心得ず。叛逆人の詮議とは、誰が詮議、それ聞かう」「ホ、ウ匹夫下郎の分として、天下に仇する汝が本名、知つたる仔細は此一品。七重八重花は咲けども山吹の、みの一つだになきぞ悲しき。此義覺えがあらうかな。諏訪明神の力石、出會うた横藏、珍らしい對面するなア。此歌は汝が先祖太田道灌が列ねし一首、みの一つだになきぞかなしきとは、足利殿に攻落され、美濃國を切取られし其鬱憤にて、義晴公を鐵砲にて、打ち奉る叛逆人の張本、美濃國の道三と、表はす簀は身の破滅。最前打つたる鐵砲の術、覺えし者は汝一人。我と我身の白狀明白、あらがふな齋藤」と、大地を見ぬく詞の石火矢、三人中へ取込めて、何と何とときめ付くれば、ほくくとうち頷き、「ホ、さすがは武田の軍帥と、呼ばるゝ勘助よく見付けた。我先祖道灌は、謙信の先祖、上杉が鎗先にかよつて死したる、恨の元は足利の武將、たよつて殺さん其爲に、北條氏時に賄し、心を合せやすくと、義晴は打つたれども、わすれがたみの松壽丸、今日此館へ來るは幸ひ、奪ひ取つて人質とし、謙信信玄氏時をも皆殺し、一天四海を掌握する此道三、汝等が手にはいつかなく。義晴を殺した鐵砲で、たをやめ御前もぶち殺した。松壽丸を是へ出し、降參せよ」と睨付くる。「ホ、ウ根強く仕込みし謀叛人、かよる危き敵の中へ、足利の公達か、ふかくと來り給はんや。松壽丸の御入と、偽り來たは此勘

助。最前鐵砲にて打たれ給ふ、たをやめ御前の御死顔、とくと拜見仕れ」と、投出す女の切首、押取つてよく見れば、「ヤア、こりや娘濡衣か。コハ、如何に」と顛倒半亂、「エ、口惜しや奇怪や。數十年の鬱憤を、一時に散ぜんと思ひしに、勝頼が恩に引かされて、敵方へ巻込まれ、大望ある此親に、よくも不覺を取らせしな。憎い女が死にざまや」と、首を打付け齒ざしむ齒ざり、そよぐ涙は諏訪の海、一度に溶る如くなり。「ヤア返らぬ繰言、絶體絶命、尋常に繩かゝれ」と、兩人一度に立ちかゝる。「シヤ物々し、道三が死物狂ひ」と立上る、弓手の脇坪はつしと射る、白羽の矢先は長尾謙信、威風烈しき眼中に、道三どつかと坐を組んで、引拔く鏃我腹に、ぐつと突き立て目を見開き、「先祖より遺恨ある上杉が子孫、謙信の矢先にかゝるは、我運命の盡きる所。本國を切取られ、美濃一つだになかりし無念。美濃尾張兩國を従へ、つひには國家を握らんとと思ひしが、我身の終りとなりたるか。及ばぬ望に足利の、武將を打つたる其天罰、信玄謙信中あしく見せかけしも、我を見出す計略とは、今まで知らざる心の淺はか。最期に魂改むる此世の饒別、北條が城廓の案内は、某具に傳へ申さん。元來相州小田原の城、堀深うして堀高く、要害の名城なれば、たやすくは落つべからず。霞晴れたる時節を窺ひ、箱根山より見下せば、敵地の構よく知るべし。其時に謙信が家の軍法さいさくの、犬を入

れ置き後より、勘助是にと切つて出で、放火を合圖に甲斐越後、諸軍一度に矢先を揃へ、指詰め引詰め射るならば、さしも堅固の城なりとも、直に乘取り氏時が、首を菴にさらさんは、道三が老後の思ひ出。さらばく」と引廻す、心も清き武士の、死しても残す名の譽、家の譽と法性の、今ぞ兜を甲州へ、戻す兩家の確執も、をさまる婚禮三々九度、勝色見する紅梅の、色ある勝頼、勇ある景勝道三が、仇も恨も晴渡る、諏訪の湖歩渡り、夜もしのよめに明渡る、甲斐と越後の兩將と、其名を今に残しける。

第五

甲斐越後、兩家の戦ひ、四度の軍術互角にて、勝負一時に決せんと、劍の刃音関の聲、山河も動くばかりなり。かゝる所へ北條氏時、村上左衛門義清、軍兵あまた引連れて、暫しと石に腰打ちかけ、「コレく村上、某が思ひの通り、兩家の滅亡今此時、なんと村上、味いでないか」と、人喰馬に合口の左衛門、「ハア、いか様おつしやる通り、此所が雙方の戦場、兩人ながら籠の鳥、必氣遣ひし給ふな」と、詞ばかりは達者でも、臆はがたく、胴ぶるひ。軍兵ども口々に、「アレくこよへ數多の人音、暫く是へ」と森の内。かよりし所に武田信玄、勝頼彈

正引連れ、團扇打ちふり宣はく、「只今の注進は、必定味方の勝軍、この勢を失ふべからず。急げ」と血氣の大將の兩人ははつと領掌白毛の駒、轡をはましてかけ出づる。思ひも寄らぬ岨かけより、「長尾謙信是に在り、見参やつ」と呼はる勢、雲に羽を伸す龍虎の挑、馬も達者乗人も達者、眞一文字に乗りかけ、眞額二つと切付くる打刀、信玄隙かさず、軍配團扇にはつしと受止め、引けば付入る受身の勝、謙信吳子が秘術を盡せば、信玄孫子が心をひねり、兩方互角の大將自身の働、生死の境、目ざましくもまた危けれ。信玄猶も床几をさらす、又打込むを團扇の拂ひ。かゝる折から、かけ来る高坂彈正、山城が、是はと驚き立寄れば、どつと寄せくる北條勢、右往左往になぎ立て、追廻し、跡を慕うて三重かけり行く。又もかけくる信玄が、謙信やらぬと打ちかゝる。コハ、いかにと雙方を、見れば寸分かはらぬ信玄、以前の信玄兜を脱捨て、「ヤア誰かは知らねども、我にかはらんと思ふ志は忝なけれど、所詮運を天に任せし此兩人。サア謙信おくれしか、勝負せよ」とありければ、此方の信玄兜を脱けば、山本勘助二人が中に割つて入り、「ハア、其お詞は重けれど、此勘助が察するには、御兩人共に國家の爲に此軍、北條村上を討亡さんとの謀、とくより知つて某が、五百騎の勢を廻し、兩人共に早搦捕つたり。ヤア、兩人、氏時村上を引かれよ」と詞の中、武田四郎勝頼、長尾三郎

本朝二十四孝終

景勝、兩人を引据ゑさせ、「天下を騒す極惡人、思ひ知れ」と兩人を指通しく、勝鬨上けて
都入、嫁入國入惡人退治、天一天上先勝の、二人の大將、二人の彈正、名を末代に山本氏、
御代萬歳とぞ祝ひける。